

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第137集

川越市・日高市

こう さん
光山遺跡群

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



35号住居跡全景



35号住居跡出土轡



17号住居跡出土
漆付着土器



30号住居跡出土
漆付着土器



31号掘立柱建物跡出土鍵

序

首都圏の幹線道路は、産業の発展や自動車の増加に伴って、いまや飽和状態に近づきつつあり、わが埼玉県もその例外ではありません。そこで東京から各地へ放射状に伸びる高速道路を環状に連絡することによって慢性的な交通渋滞を緩和し、東京近郊の都市を相互に連絡して地域の活性化を促進するために計画されているのが、首都圏中央連絡自動車道、通称圏央道です。

圏央道は、まず、埼玉県鶴ヶ島市から東京都青梅市までの区間で事業が着工されましたが、埼玉県内の建設予定地には貴重な遺跡が多く存在しておりました。そこで、これら埋蔵文化財の取り扱いについては関係各機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、路線決定に当たってどうしても避けきれない遺跡については、建設省の委託を受けて、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行うことになりました。

川越市と日高市には、喜多院や高麗神社など有名な文化財も多く、歴史が古く埋蔵文化財も豊富な地域として知られています。路線内では川越市で2遺跡、日高市で9遺跡が該当し、発掘調査によって貴重な成果を得ることができました。本書はこのうち、川越市光山遺跡・笹原遺跡、日高市上猿ヶ谷戸遺跡・長山甲遺跡・西ノ久保遺跡の発掘調査報告書であります。ここでは旧石器時代から近世にかけての多くの資料が提供されましたが、とくに、光山遺跡と上猿ヶ谷戸遺跡では、古墳時代から奈良時代の集落を調査することができました。この地域は、奈良時代に朝鮮半島系の渡来人をあつめて設置したとされる、高麗郡に所属していたと考えられ、高麗神社や聖天院など高麗郡に関わる文化財が今に伝えられています。光山遺跡では、鉄製の轡や鍵あるいは多くの墨書土器などが出土し、高麗郡に関わる遺跡として注目されます。本書が学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓蒙および教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書の刊行に至るまで御協力下さいました建設省大宮国道工事事務所、埼玉県土地開発公社圏央道事務所、川越市教育委員会、日高市教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

- 1 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

() 内は遺跡の略号

光山・笹原遺跡 (KZN)	所在地	川越市笠幡2787他
	文化庁指示通知	委保第5-565号 平成2年10月2日
上猿ヶ谷戸遺跡 (KZN 2・3)	所在地	日高市下高萩2083他
	文化庁指示通知	委保第5-578号 平成3年6月7日 委保第5-192号 平成4年4月6日 委保第5-1891号 平成5年3月31日 委保第5-547号 平成5年6月8日
西ノ久保遺跡 (NSNKB)	所在地	日高市下大谷沢西ノ久保731他
	文化庁指示通知	委保第5-558号 平成2年10月2日
長山甲遺跡 (NGYMK)	所在地	日高市下大谷沢長山甲1944他
	文化庁指示通知	委保第5-561号 平成2年10月2日

なお、光山遺跡と上猿ヶ谷戸遺跡は所在する市が異なるため、別の遺跡として調査を実施したが、同一遺跡であることが判明したので、本書では笹原遺跡を含めて光山遺跡群として扱った。

- 2 発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道の建設に伴なうものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課（平成4年度より生涯学習部文化財保護課）が調整し、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成期間および担当は下記のとおりである。

長山甲遺跡	平成元年4月1日～平成元年6月30日	井上尚明・細田勝
西ノ久保遺跡	平成元年7月1日～平成元年9月30日	井上尚明・細田勝
光山遺跡・笹原遺跡	平成元年10月1日～平成2年9月30日	井上尚明・細田勝
上猿ヶ谷戸遺跡	平成2年10月1日～平成2年12月31日	井上尚明
	平成3年9月1日～平成4年3月31日	井上尚明・佐藤康二
	平成4年11月1日～平成5年3月31日	村田健二・石坂俊郎
	平成5年4月1日～平成5年5月31日	鈴木秀雄・栗岡潤
整理・報告書作成	平成5年4月1日～平成6年3月31日	井上尚明

- 4 出土品の整理および図版の作成は井上尚明が担当し、中島令子の補助を受けた。発掘調査時の写真撮影は各担当者が、遺物写真撮影は井上が行った。
- 5 本書の執筆は主に井上がこれにあたり、Ⅶの一部を文末に記したとおり分担した。
- 6 本書の編集は資料部資料整理第一課の井上が担当した。
- 7 本書に掲載した資料は、平成6年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 8 本書の作成にあたり、川越市教育委員会、日高市教育委員会および城近憲市 中平薫 斉藤稔 渡辺一 西川制 加藤恭朗の各氏の御教示・御協力を賜った。

凡 例

本書における記述・挿図の基準は、原則として下記のとおりとした。

- 1 遺構番号は光山遺跡と上猿ヶ谷戸遺跡の統合により本書で改め、新旧対照表を245頁～246頁に記した。

なお、光山遺跡群はすでに現地説明会資料などで紹介されているが、内容・遺構番号などは全て本書が優先するものである。

- 2 グリッドは10m方眼を採用し、K-7グリッドは座標値X軸-10,250,000 Y軸-39,900,000 標高47,086である。
- 3 方位は全て座標北を指し、遺構の主軸方向もこれを基準としている。
- 4 遺構図の縮尺は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・井戸跡は1/60 カマド1/30 遺構群分布図1/600である。これ以外のものは、図に表記してある。
- 5 遺構挿図中の記号・スクリーントーンの区別は凡例図のとおりである。
- 6 遺物分布図中の番号は遺物実測図の番号に対応させ、接合関係を実線で結んだ。
- 7 土層図・断面図の数値は標高を示す。(単位m)
- 8 遺物実測図の縮尺は一部を除き、土器1/4 石製品・土製品・鉄製品1/3とし、図にスケールを付してある。実測の基準とスクリーントーンの区別は凡例図のとおりである。
- 9 土器の実測図において、復元実測を行ったものは中心線を一点鎖線で示し、口径が明瞭でないものについては、口縁部を中心線から離して表現した。また、断面は土師器と縄文土器、陶磁器を白抜き、須恵器は黒塗りとした。矢印は削りの方向である。
- 10 土器観察表の色調や含有物などの略号は下記のとおりである。

色 調 1=褐色 2=暗褐色 3=赤褐色 4=橙褐色 5=灰色 6=灰白色

7=灰褐色 8=青灰色 9=灰黒色 10=その他

含有物 A=赤色粒子 B=石英 C=雲母 D=黒褐色粒子 E=白色粒子

F=光沢のある黒色粒子 G=自然釉 H=白色針状物質 I=その他

焼 成 良好=I 普通=II 良くない=III

- 11 須恵器観察の略号

クロ回転方向 右=R 左=L

底部切り離しと調整の分類

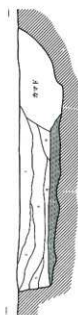
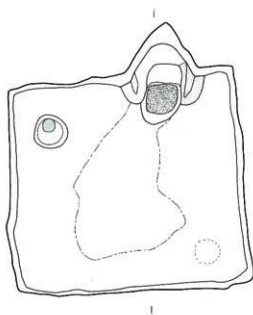
全面寛削り A 1 < 2 ⇒ a 記載例 RBa	周辺寛削り B 1 ≥ 2 ⇒ b	糸切離し C		

- 12 遺構の略号は以下のとおりである。

竪穴住居跡= SJ 掘立柱建物跡= SB 櫛列= SA 井戸= SE 土壇= SK

溝= SD 竪穴状遺構= SX 塚= SZ 集石= SC

凡例図



- 焼土
- 粘土
- 貼床
- 床面緊縮範囲
- 貼床下遺構
- 柱痕



土師器



須恵器

復元実測

- 転用瓦厚減部
- 赤彩
- 漆付着
- 内黒



糸切り痕
施削り



1 2

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査の概要	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 調査の組織	2
3 調査の経過	3
4 発掘調査と整理の方法	6
II 遺跡の立地と環境	8
1 遺跡をとりまく自然環境	8
2 光山遺跡群周辺の歴史的環境	10
III 遺跡の概要	13
1 調査成果の概要	13
2 光山遺跡群の奈良時代集落の広がり	13
3 土地利用の変遷	14
4 遺跡の基本層序	16
IV 光山遺跡群の遺構と遺物	18
1 奈良時代の遺構と遺物	18
2 その他の時代の遺構と遺物	222
V 長山甲遺跡の遺構と遺物	249
VI 西ノ久保遺跡の遺構と遺物	260
VII 調査成果のまとめ	268
1 奈良時代の土器の変遷	268
2 集落構成について	277
3 遺構・遺物各論	281
① 竪穴住居跡の構造について	281
② 掘立柱建物跡の分析	285
③ 特殊な形態の遺構	286
④ 墨書土器とその出土状況	289
⑤ 鉄製品とその出土状況	293
⑥ 槽について	296
⑦ 桃の種子について	301
⑧ 漆の付着した土器	303
⑨ 石製品の出土状況	304

⑩ コップ形土器について.....	305
⑪ 土器の胎土について.....	307
4 光山遺跡群の評価と歴史的位置付け.....	308

挿 図 目 次

第1図 調査工程	4	第26図 5号住居跡出土遺物	33
第2図 遺跡位置図	5	第27図 6号住居跡	33
第3図 グリッド配置図	7	第28図 6号住居跡カマド	34
第4図 遺跡周辺縦断模式図	8	第29図 6号住居跡遺物分布図	35
第5図 遺跡立地図	9	第30図 6号住居跡掘り方	36
第6図 光山遺跡群周辺の遺跡分布図	11	第31図 6号住居跡出土遺物	37
第7図 奈良時代集落の広がり	14	第32図 7号住居跡	38
第8図 標準土層図	16	第33図 7号住居跡カマド	39
第9図 奈良時代遺構分布図 No.1	19	第34図 7号住居跡出土遺物	39
第10図 1号住居跡	20	第35図 8号住居跡	40
第11図 1号住居跡カマド	21	第36図 8号住居跡カマド	41
第12図 1号住居跡出土遺物(1)	22	第37図 8号住居跡出土遺物	42
第13図 1号住居跡出土遺物(2)	23	第38図 9号住居跡出土遺物	42
第14図 2号住居跡	24	第39図 9号住居跡	43
第15図 2号住居跡カマド	24	第40図 9号住居跡遺物分布図	44
第16図 2号住居跡出土遺物	25	第41図 9号住居跡掘り方	45
第17図 3号住居跡	25	第42図 10号住居跡	46
第18図 3号住居跡遺物分布図	26	第43図 10号住居跡遺物分布図	47
第19図 3号住居跡カマド	27	第44図 10号住居跡カマド	48
第20図 3号住居跡出土遺物	28	第45図 10号住居跡出土遺物(1)	49
第21図 4号住居跡	29	第46図 10号住居跡出土遺物(2)	50
第22図 4号住居跡カマド	30	第47図 10号住居跡出土遺物(3)	51
第23図 4号住居跡出土遺物	31	第48図 11号住居跡	52
第24図 5号住居跡	32	第49図 11号住居跡出土遺物	52
第25図 5号住居跡カマド	32	第50図 11号住居跡カマド	53

第51図	12号住居跡	53	第87図	23号住居跡	81
第52図	12号住居跡出土遺物	54	第88図	23号住居跡カマド	81
第53図	13号住居跡	54	第89図	23号住居跡出土遺物	82
第54図	13号住居跡出土遺物	55	第90図	24号住居跡	82
第55図	14号住居跡	55	第91図	24号住居跡出土遺物	82
第56図	14号住居跡遺物分布図	56	第92図	25号住居跡	83
第57図	14号住居跡カマド	56	第93図	25号住居跡出土遺物	83
第58図	14号住居跡出土遺物	57	第94図	26号住居跡	84
第59図	15号住居跡	58	第95図	26号住居跡出土遺物	85
第60図	15号住居跡カマド	59	第96図	27号住居跡出土遺物 (1)	86
第61図	15号住居跡遺物分布図	60	第97図	27号住居跡	87
第62図	15号住居跡出土遺物	61	第98図	27号住居跡出土遺物 (2)	89
第63図	16号住居跡	62	第99図	28号住居跡	90
第64図	奈良時代遺構分布図 No. 2	63	第100図	28号住居跡カマド	91
第65図	17号住居跡	64	第101図	28号住居跡出土遺物	91
第66図	17号住居跡カマド	65	第102図	29号住居跡	92
第67図	17号住居跡遺物分布図	66	第103図	29号住居跡出土遺物	93
第68図	17号住居跡出土遺物	67	第104図	30号住居跡	94
第69図	18号・19号住居跡	68	第105図	30号住居跡カマド A	95
第70図	18号・19号住居跡遺物分布図	69	第106図	30号住居跡カマド B	96
第71図	18号住居跡カマド	70	第107図	30号住居跡出土遺物	97
第72図	18号住居跡出土遺物	70	第108図	31号住居跡	98
第73図	19号住居跡カマド	71	第109図	31号住居跡カマド	99
第74図	19号住居跡出土遺物	72	第110図	31号住居跡出土遺物	99
第75図	20号住居跡	72	第111図	32号住居跡	100
第76図	20号住居跡カマド	73	第112図	32号住居跡カマド	101
第77図	20号住居跡出土遺物	73	第113図	32号住居跡遺物分布図	101
第78図	21号住居跡	74	第114図	32号住居跡出土遺物	102
第79図	21号住居跡カマド	75	第115図	33号住居跡	104
第80図	21号住居跡出土遺物	75	第116図	33号住居跡カマド	104
第81図	22号住居跡	76	第117図	33号住居跡出土遺物	105
第82図	22号住居跡カマド	77	第118図	34号住居跡	105
第83図	22号住居跡カマド掘り方	78	第119図	34号住居跡出土遺物	105
第84図	22号住居跡遺物分布図	78	第120図	奈良時代遺構分布図 No. 3	106
第85図	22号住居跡出土遺物 (1)	79	第121図	35号住居跡	107
第86図	22号住居跡出土遺物 (2)	80	第122図	35号住居跡カマド	108

第123図	35号住居跡遺物分布図	109	第159図	48号住居跡カマド	138
第124図	35号住居跡出土遺物(1)	110	第160図	48号住居跡出土遺物	139
第125図	35号住居跡出土遺物(2)	111	第161図	49号住居跡	140
第126図	35号住居跡出土馬具	112	第162図	49号住居跡カマドA	141
第127図	36号住居跡	114	第163図	49号住居跡カマドB	142
第128図	36号住居跡出土遺物(1)	115	第164図	49号住居跡カマドC	142
第129図	36号住居跡出土遺物(2)	116	第165図	49号住居跡出土遺物	143
第130図	37号住居跡	117	第166図	50号住居跡	144
第131図	37号住居跡カマド	118	第167図	50号住居跡カマド	145
第132図	37号住居跡遺物分布図	118	第168図	50号住居跡出土遺物	145
第133図	37号住居跡出土遺物	119	第169図	51号住居跡	145
第134図	38号住居跡	120	第170図	51号住居跡出土遺物	146
第135図	38号住居跡カマド	121	第171図	52号住居跡	147
第136図	38号住居跡出土遺物	122	第172図	52号住居跡出土遺物	148
第137図	39号住居跡	122	第173図	53号住居跡(1/120)	150
第138図	39号住居跡出土遺物	123	第174図	53号住居跡カマド	151
第139図	40号住居跡カマド	123	第175図	53号住居跡出土遺物(1)	152
第140図	40号住居跡	124	第176図	53号住居跡出土遺物(2)	153
第141図	40号住居跡出土遺物	125	第177図	53号住居跡出土遺物(3)	154
第142図	41号住居跡	126	第178図	53号住居跡出土遺物(4)	155
第143図	41号住居跡出土遺物	126	第179図	54号住居跡	157
第144図	42号住居跡	127	第180図	54号住居跡カマド	157
第145図	42号住居跡出土遺物	127	第181図	54号住居跡出土遺物	158
第146図	43号住居跡	128	第182図	55号住居跡	158
第147図	43号住居跡カマド	129	第183図	55号住居跡出土遺物	159
第148図	43号住居跡出土遺物	129	第184図	奈良時代遺構分布図 No.4	159
第149図	44号住居跡	130	第185図	1号掘立柱建物跡	160
第150図	44号住居跡カマド	131	第186図	2号掘立柱建物跡	161
第151図	44号住居跡出土遺物	131	第187図	3号掘立柱建物跡	161
第152図	45号住居跡	132	第188図	4・5号掘立柱建物跡	162
第153図	45号住居跡出土遺物	132	第189図	6号掘立柱建物跡	163
第154図	46号住居跡カマド	133	第190図	6号掘立柱建物跡出土遺物	163
第155図	46号住居跡	134	第191図	7号掘立柱建物跡	164
第156図	46号住居跡出土遺物	135	第192図	8号掘立柱建物跡	165
第157図	47号住居跡	136	第193図	8号掘立柱建物跡出土遺物	165
第158図	48号住居跡	137	第194図	9号掘立柱建物跡(1)	166

第195図	9号掘立柱建物跡(2)	167	第231図	35号掘立柱建物跡	196
第196図	9号掘立柱建物跡出土遺物	167	第232図	36号掘立柱建物跡	197
第197図	10号掘立柱建物跡	168	第233図	37号掘立柱建物跡	198
第198図	10号掘立柱建物跡出土遺物	169	第234図	37号掘立柱建物跡出土遺物	199
第199図	11号掘立柱建物跡	169	第235図	38号掘立柱建物跡出土遺物	199
第200図	12号掘立柱建物跡	170	第236図	38号掘立柱建物跡	200
第201図	13号掘立柱建物跡	171	第237図	39号掘立柱建物跡	201
第202図	14号掘立柱建物跡	172	第238図	40号掘立柱建物跡	204
第203図	15号掘立柱建物跡	173	第239図	柱穴列	205
第204図	16号掘立柱建物跡	174	第240図	1号井戸	206
第205図	17号掘立柱建物跡	175	第241図	1号井戸出土遺物(1)	208
第206図	17号掘立柱建物跡出土遺物	176	第242図	1号井戸出土遺物(2)	209
第207図	18号掘立柱建物跡出土遺物	176	第243図	2号井戸	209
第208図	18号掘立柱建物跡	177	第244図	2号井戸出土遺物	209
第209図	19号掘立柱建物跡	178	第245図	3号井戸	210
第210図	19号掘立柱建物跡出土遺物	178	第246図	3号井戸出土遺物(1)	211
第211図	20号掘立柱建物跡	179	第247図	3号井戸出土遺物(2)	212
第212図	21号掘立柱建物跡	180	第248図	1～10号・12号土壇	215
第213図	21号掘立柱建物跡出土遺物	181	第249図	11号土壇	216
第214図	22号掘立柱建物跡	182	第250図	土壇出土遺物	217
第215図	23号掘立柱建物跡	183	第251図	1号溝	218
第216図	24号掘立柱建物跡	184	第252図	2号溝	218
第217図	24号掘立柱建物跡出土遺物	184	第253図	3号溝	219
第218図	25号掘立柱建物跡	185	第254図	1号・2号溝出土遺物	219
第219図	26号掘立柱建物跡	186	第255図	グリッド出土遺物	220
第220図	27号掘立柱建物跡	187	第256図	旧石器時代石器	222
第221図	28号掘立柱建物跡	188	第257図	笹原地区全測図	223
第222図	29号掘立柱建物跡	189	第258図	J1～6号土壇	224
第223図	29号掘立柱建物跡出土遺物	190	第259図	縄文土器	225
第224図	30号掘立柱建物跡	191	第260図	縄文時代の石器	226
第225図	31号掘立柱建物跡	192	第261図	竪穴状遺構	228
第226図	31号掘立柱建物跡出土遺物	193	第262図	青磁	229
第227図	32号掘立柱建物跡	193	第263図	近世遺構分布図	230
第228図	33号掘立柱建物跡	194	第264図	近世陶磁器(1)	231
第229図	34号掘立柱建物跡	195	第265図	近世陶磁器(2)	232
第230図	35号掘立柱建物跡出土遺物	195	第266図	近世陶磁器(3)	233

第267図	近世陶磁器 (4)	234	第294図	西ノ久保遺跡出土石器	267
第268図	近世遺物 (1)	235	第295図	0期の土器群	269
第269図	近世遺物 (2)	236	第296図	須恵器坏分類図	270
第270図	近世土壇	237	第297図	須恵器坏分類統計図	270
第271図	土壇出土カワラケ	238	第298図	I期の土器群	273
第272図	古銭 (1)	239	第299図	II期の土器群	274
第273図	古銭 (2)	240	第300図	III期の土器群	275
第274図	1号塚	242	第301図	0期・I期の集落	278
第275図	2号塚	243	第302図	II期・III期の集落	280
第276図	3・4号塚	244	第303図	竪穴住居跡規模と主軸方向	281
第277図	長山甲・西ノ久保遺跡位置図	248	第304図	棚状遺構集成	282
第278図	長山甲遺跡全測図	250	第305図	出入口施設集成	283
第279図	長山甲遺跡土壇 (1)	251	第306図	掘立柱建物跡規模と主軸方向	285
第280図	長山甲遺跡土壇 (2)	252	第307図	掘立柱建物跡群土器分布図	287
第281図	長山甲遺跡土壇 (3)	253	第308図	墨書土器出土位置模式図	289
第282図	長山甲遺跡土壇 (4)	254	第309図	文字集成	291
第283図	長山甲遺跡土壇 (5)	255	第310図	硯・篋記号土器出土位置模式図	292
第284図	長山甲遺跡溝状遺構	256	第311図	種々葉帳の福信自署	292
第285図	長山甲遺跡集石	257	第312図	鉄製品出土位置模式図	293
第286図	長山甲遺跡出土土器	258	第313図	歴史時代の出土書	298
第287図	長山甲遺跡出土石器	259	第314図	石製品出土位置模式図	305
第288図	西ノ久保遺跡全測図	261	第315図	コップ形土器集成図	306
第289図	西ノ久保遺跡縄文時代土壇 (1)	262	第316図	分析資料	307
第290図	西ノ久保遺跡縄文時代土壇 (2)	263			
第291図	西ノ久保遺跡溝状遺構	263			
第292図	西ノ久保遺跡中世土壇	265			
第293図	西ノ久保遺跡出土土器	266			

写真図版目次

図版 1	上空から見た光山遺跡群（川越市分） 小群川上空（南）から見た光山遺跡群	図版13	13号住居跡全景 14号住居跡全景 15号住居跡確認状況
図版 2	東上空から見た住居跡群 斜面部の遺構群（日高市分）	図版14	15号住居跡全景 15号住居跡カマド 17号住居跡カマド
図版 3	重機による表土除去 発掘調査状況 台地上位面の遺構群	図版15	18・19号住居跡全景 18号住居跡カマド 18号住居跡出土紡錘車
図版 4	1号住居跡全景 1号住居跡出土土器・南壁下床直遺物 2号住居跡全景	図版16	20号住居跡全景・21号住居跡全景 22・26号住居跡全景
図版 5	3号住居跡全景 4号住居跡全景 4号住居跡棚状遺構出土土器	図版17	22号住居跡カマド土層 23号住居跡全景 24号住居跡全景
図版 6	5号住居跡全景 6号住居跡全景 6号住居跡カマド	図版18	25号住居跡全景 27号住居跡全景 27号住居跡周辺
図版 7	7号住居跡全景 7号住居跡土層断面 7号住居跡カマド土層	図版19	28～30号住居跡確認状況 28～30号住居跡全景 28号住居跡全景
図版 8	7号住居跡カマド 8号住居跡全景 8号住居跡カマド	図版20	28号住居跡カマド土層 28号住居跡張出し部 30号住居跡全景（南から）
図版 9	9号住居跡全景（北から） 9号住居跡土層断面 9号住居跡・貼床下状況	図版21	30号住居跡全景（西から） 30号住居跡カマドA 30号住居跡貯蔵穴
図版10	10号住居跡全景 10号住居跡カマド 10号住居跡張出し部	図版22	31号住居跡全景 32号住居跡全景 32号住居跡土層断面 32号住居跡出土土器
図版11	10号住居跡遺物出土状況 10号住居跡南壁下土器出土状況 10号住居跡カマド土器出土状況	図版23	33号住居跡全景 33号住居跡カマド 34号住居跡全景
図版12	11号住居跡全景 11号住居跡土層断面 12号住居跡全景	図版24	35号住居跡全景

	35号住居跡嚮出土状況		12号掘立柱建物跡全景
図版25	35号住居跡カマド		13号掘立柱建物跡全景
	35号住居跡遺物出土状況	図版37	12号掘立柱建物跡全景
	35号住居跡出土土器		13号掘立柱建物跡全景
図版26	36号住居跡全景		14号掘立柱建物跡全景
	37号住居跡全景		15号掘立柱建物跡全景
	37号住居跡カマド土層	図版38	16号掘立柱建物跡全景
図版27	40号住居跡全景		17号掘立柱建物跡全景
	40号住居跡カマド		18号掘立柱建物跡全景
	41号住居跡全景	図版39	19号掘立柱建物跡全景
図版28	42号住居跡全景		21号掘立柱建物跡全景
	43号住居跡全景		22号掘立柱建物跡全景
	44号住居跡全景	図版40	22・23号掘立柱建物跡全景
図版29	46号住居跡全景		24号掘立柱建物跡全景
	46号住居跡カマド	図版41	24号掘立柱建物跡柱穴確認状況
	48号住居跡全景		24号掘立柱建物跡柱穴土層
図版30	48号住居跡カマド		25号掘立柱建物跡全景
	49号住居跡全景	図版42	27号掘立柱建物跡全景 (南から)
	50号住居跡全景		27号掘立柱建物跡柱穴土層
図版31	52号住居跡全景	図版43	29号掘立柱建物跡全景
	53号住居跡全景		30号掘立柱建物跡柱穴土層
	53号住居跡カマド		31号掘立柱建物跡全景
図版32	53号住居跡貯蔵穴	図版44	32号掘立柱建物跡全景
	53号住居跡柱穴土層		33号掘立柱建物跡全景
	55号住居跡全景		33号掘立柱建物跡柱穴確認状況
図版33	1号掘立柱建物跡全景	図版45	34号掘立柱建物跡全景
	2号掘立柱建物跡全景		35号掘立柱建物跡全景
	3号掘立柱建物跡全景		35号掘立柱建物跡柱穴土層
	4号掘立柱建物跡全景	図版46	36号掘立柱建物跡全景
図版34	5号掘立柱建物跡全景		37号掘立柱建物跡全景
	6号掘立柱建物跡全景		38号掘立柱建物跡全景
	7号掘立柱建物跡全景	図版47	39号掘立柱建物跡全景
図版35	8号掘立柱建物跡全景		38・39号掘立柱建物跡全景
	9号掘立柱建物跡全景		38・39号掘立柱建物跡を上空から撮影
	10号掘立柱建物跡全景	図版48	1号井戸確認状況、後方は38号住居跡
図版36	11号掘立柱建物跡全景・確認状況		1号井戸土層断面

	1号井戸全景	図版60	14・15・17・19・21・22号住居跡出土土器
図版49	1号井戸遺物出土状況	図版61	22・23・25・27・29号住居跡出土土器
	1号井戸調査状況	図版62	29・30・31・32・35号住居跡出土土器
図版50	2号井戸上層礫検出状況	図版63	35・36号住居跡出土土器
	2号井戸全景	図版64	36・37・38・40号住居跡出土土器
	3号井戸全景	図版65	44・46・48・49・51・52・53号住居跡出土土器
図版51	1号土壌全景	図版66	53号住居跡出土土器
	2号土壌全景	図版67	53号住居跡出土土器
	5号土壌全景		18号掘立柱建物跡出土土器、1号井戸出土土器、グリッド出土土器
	9・10号土壌全景	図版68	3号井戸出土土器
図版52	11号土壌土層断面	図版69	墨書土器(1)
	11号土壌土器出土状況	図版70	墨書土器(2)
	11号土壌全景	図版71	篋描き土器(1)
図版53	1号溝全景	図版72	篋描き土器(2)
	2号溝発掘調査状況	図版73	転用硯土器
	2号溝全景	図版74	鉄製品(1)
図版54	J2号土壌全景	図版75	鉄製品(2)
	J3号土壌全景	図版76	石製品
	J4号土壌全景	図版77	近世陶磁器(1)
	J5号土壌全景	図版78	近世陶磁器(2)
	J6号土壌全景	図版79	長山甲調査風景、15号土壌、7・10・11・12・13・37号土壌
	笹原地区調査状況	図版80	1・2・3・4号集石、1号溝、1号溝土層断面(東壁側)
図版55	K3号土壌	図版81	西ノ久保遺跡全景、8・9・17・18・23・24・30号土壌
	K11号土壌		
	K12号土壌		
図版56	2～4号塚全景(北から)		
図版57	1・3・4・5・6号住居跡出土土器		
図版58	6・8・9・10号住居跡出土土器		
図版59	10・13・14号住居跡出土土器		

写 真 目 次

重機による表土除去作業・15号住居跡周辺の調査	60
東上空から見た光山遺跡群（川越市分）、左上方が小畔川	62
18号住居跡カマド断面と土器出土状況、右から遺物No 3・4・5	69
27号住居跡柱穴内土器出土状況	85
35号住居跡と遺物出土状況	113
南西から見た43号住居跡	129
46号住居跡遺物出土状況	135
49号住居跡カマドB	141
53号住居跡、低高度からの航空写真	149
53号住居跡カマド土層断面	151
台地上位面の掘立柱建物跡群（南から）	160
手前が20号住居跡で周辺に17～20号掘立柱建物跡が並ぶ	173
18号掘立柱建物跡出土土器	176
22号掘立柱建物跡全景（西から）	181
30号掘立柱建物跡全景と調査状況	190
31号掘立柱建物跡土層断面	193
33号掘立柱建物跡の柱穴確認状況	194
小畔川上空から・39号掘立柱建物跡全景	203
1号井戸、井戸枠痕跡・1号井戸、壁の工具痕	207
上空から見た1号溝と2号溝に挟まれた地区	221
北から見た調査区南端	249
西ノ久保遺跡	260
鍵のX線写真（原寸）	294
分析資料の断面写真	308
付図1 光山遺跡群全測図	
付図2 53号竪穴住居跡	

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

首都圏中央連絡自動車道は、東京都心から40～50kmに位置する中核都市を相互に連結するとともに、首都圏から放射状にのびる各高速道路（東名、中央、関越、東北、常磐、東関東）を連結し、地域間の交通の円滑化及び土地利用の適正な誘導を図り、諸都市の健全な発展を促進させる役割を果たすことを目的として計画された。県内では入間市の都県境から関越自動車道鶴ヶ島ジャンクションまでの延長19.8kmで事業が進められてきた。埼玉県としても県内の主要都市間を1時間以内で移動できる道路網の整備構想のもとに積極的に本事業の推進を図ってきたところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱い等について、文化財保護課では昭和62年度に係関係市町村教育委員会の協力を得て実施した分布調査をはじめとし、事業の進捗状況に応じて関係者間で協議を重ねてきたところである。

建設省事業地については、平成元年7月24日付け大国土第117号、平成2年3月30日付け大国土第30号、平成3年6月21日付け大国土第25号で関東地方建設局大宮国道建設事務所長から埼玉県教育委員会教育長あて埋蔵文化財包蔵地の所在について照会があった。

文化財保護課では分布調査の結果等に基づき、それぞれ平成元年9月4日付け教文第703号、平成2年4月16日付け教文第37号、平成3年8月19日付け教文第397号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

埋蔵文化財の所在

所 在 市	遺 跡 名
日 高 市	谷津遺跡、西ノ久保遺跡、長山甲遺跡、上猿ヶ谷戸遺跡
川 越 市	光山遺跡、笹原遺跡
鶴 ヶ 島 市	向山遺跡、横田遺跡、柳戸遺跡、青柵遺跡、三ツ木遺跡、後A遺跡

上記の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、事業の計画変更が不可能と判断されたので記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査の実施について建設省関東地方建設局大宮国道事務所、文化財保護課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで協議した。その結果、昭和63年度に谷津遺跡、西ノ久保遺跡、長山甲遺跡の第1次調査を実施することとなった。この成果により調査期間等を調整し、平成元年度に西ノ久保遺跡、長山甲遺跡、光山遺跡、平成2年度から上猿ヶ谷戸遺跡の発掘調査を開始し、その後、未買収地については関係者間で協議を重ね、用地の買収に応じて調査を進めた。

各遺跡の文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に対する文化庁長官の通知は、例言にある通りである。(文化財保護課)

2 調査の組織

主 体 者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘調査（平成元年～5年）

理 事 長 荒 井 修 二（H1～4）
副 理 事 長 百 瀬 陽 二（H1）
早 川 智 明（H2～4）
副 理 事 長 富 田 真 也（H5）
専 務 理 事 横 川 好 富（H5）
常 務 理 事 古 市 芳 之（H1・2）
兼 管 理 部 長 倉 持 悦 夫（H3・4）
柴 崎 光 生（H5）
理 事 兼 吉 川 國 男（H1）
調 査 研 究 部 長
理 事 兼 吉 川 國 男（H2）
調 査 部 長 栗 原 文 藏（H3・4）
中 島 利 治（H5）

管理部

管 理 部 長 古 市 芳 之
倉 持 悦 夫
管 理 課 長 関 野 栄 一（H1）
経 理 課 長 関 野 栄 一（H2～4）
庶 務 課 長 高 田 弘 義（H2・3）
萩 原 和 夫（H4・5）
主 査 松 本 晋（H2・3）
賛 田 清（H4・5）
主 事 江 田 和 美（H1）
主 任 江 田 和 美（H2～4）
主 事 長 滝 美 智 子（H1～5）
主 事 本 庄 朗 人（H1・2）
主 事 齊 藤 勝 秀（H1・2）
主 事 福 田 昭 美（H3～5）
主 事 腰 塚 雄 二（H3～5）
主 事 菊 池 久（H3～5）

調査部（H1は調査研究部）

部 長 吉 川 國 男
栗 原 文 藏
中 島 利 治

副 部 長 塩 野 博（H1・2）
梅 沢 太 久 夫（H3・4）
高 橋 一 夫（H5）
第 一 課 長 坂 野 和 信（H1～3）
第 二 課 長 坂 野 和 信（H4）
第 二 課 長 大 和 修（H5）
主 査 村 田 健 二（H4）
主 任 調 査 員 井 上 尚 明（H1～3）
主 任 調 査 員 鈴 木 秀 雄（H5）
主 任 調 査 員 細 田 勝（H1）
主 任 調 査 員 石 坂 俊 郎（H4）
調 査 員 佐 藤 康 二（H3）
調 査 員 栗 岡 潤（H5）

整理報告書刊行（平成5年）

理 事 長 荒 井 桂
副 理 事 長 富 田 真 也
専 務 理 事 横 川 好 富
常 務 理 事 柴 崎 光 生
兼 管 理 部 長
理 事 兼 中 島 利 治
調 査 部 長

管理部

庶 務 課 長 萩 原 和 夫
主 査 賛 田 清
主 事 菊 池 久
経 理 課 長 関 野 栄 一
主 任 江 田 和 美
主 事 長 滝 美 智 子
主 事 福 田 昭 美
主 事 腰 塚 雄 二

資料部

部 長 小 川 良 祐
副 部 長 兼 資 料 谷 井 彪
整 理 第 一 課 長
主 任 調 査 員 井 上 尚 明

3 調査の経過

首都圏中央連絡自動車道に関わる埋蔵文化財の発掘調査は、埼玉県では昭和63年度から日本道路公団施工地区から開始され、平成4年度には調査報告書の第1冊目が刊行されている。建設省施工地区である光山遺跡群他の調査については、平成元年度に調査が始まり、用地買収などの関係で平成5年度まで断続的に続けられた。また、この期間中には鶴ヶ島市柳戸遺跡などの調査も開始しており、調査計画と工事・用地買収の進捗状況を調整するため、建設省と適宜協議をしつつ調査を進めた。各遺跡の調査期間は例言に述べたとおりであるが、以下に年度毎にその経過を概観する。

平成元年度

4月1日から日高市長山甲遺跡の調査を開始する。ほぼ全域が山林となっており、大木の根が入り組んで、重機による表土除去作業も難航した。調査は南側から進め、北の小畔川を望む台地縁辺まで実施した。調査面積は15000㎡で、縄文時代を中心とする遺構・遺物が台地先端部近くに集中して発見された。平成元年7月1日からは長山甲遺跡と小さな谷を挟んで南に位置する西ノ久保遺跡の調査を開始した。この遺跡も長山甲遺跡と同様に雑木林が広がり、調査面積も17000㎡と広いため残土の処理には苦勞した。標高55mほどの調査区全体に縄文時代の遺構・遺物が点在し、中世の土壌も確認できた。9月30日に長山甲遺跡・西ノ久保遺跡の航空写真を撮影して、両遺跡の調査は終了した。

西ノ久保遺跡調査中の9月から、小畔川の対岸にある川越市光山遺跡の調査の準備を進め、10月1日から本格的に調査を開始した。光山遺跡は一部が山林になっている他は、陸田と畑となっており、作物の収穫を待ちながら北側から重機を使用して表土除去を進めた。数軒の竪穴住居跡が確認できた段階で、これらの遺構が部分的な擾乱はあるものの全体的には保存状態が良好であることが判明したので、人力により遺構確認を実施した。発見した竪穴住居跡と掘立柱建物跡は全て奈良時代に属するもので、集落跡は南に接する日高市上猿ヶ谷戸遺跡へと連続している。奈良時代の他には、縄文時代の土壌や石器が出土している。また、調査区およびその周囲には中世あるいは近世と思われる塚が点在しており、特に日高市との市境にある日枝神社のまわりには、社を載せたものを含めて4基の塚が集中している。

なお、工事との関係で光山遺跡調査中に、光山遺跡と小さな谷を挟んで北側に対峙する笹原遺跡の調査が入り、一部並行して調査を進めた。3月28日に航空写真を撮影して、縄文時代と奈良時代に関する調査を終了した。

平成2年度

4月から光山遺跡の調査を継続したが、奈良時代の住居跡からポイントが出土していたので、今年度は旧石器時代の調査を実施した。任意に2mグリッドを設定して土層の確認をしながらハードロームまで掘り進めた。これによりソフトローム中からポイントを発見することができた。また、5月19日には現地説明会を開催し、県内外から約500名の参加者があった。

10月1日からは、上猿ヶ谷戸遺跡の調査が一部可能となり、光山遺跡から小畔川へ向かって傾斜する斜面部の調査に着手した。斜面であるためソフトローム上面に暗褐色土が厚く堆積し、これが

遺構確認面となっている。また、調査以前は墓地・人家・山林となっていたので攪乱が多く、削平や破壊された遺構もあった。かなりの斜面であったが、光山遺跡と同じ時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、一部やり方を設定して測量した。今次の調査は12月に終了し、1月からは鶴ヶ島市柳戸遺跡の調査を開始した。

平成3年度

鶴ヶ島地区の用地買収が進み、今年度から建設省担当地域には2班の調査班がこれに当たることとなり、柳戸遺跡の他に横田遺跡・新山遺跡が加わった。上猿ヶ谷戸遺跡の2度目の調査は9月1日から始まり、昨年度調査区の市道を挟んだ南側を中心に3500㎡を対象とした。これまでの調査成果と同様に奈良時代の集落が連続しており、合計すると竪穴住居跡37軒・掘立柱建物跡32棟となった。また、竪穴住居跡から完形の甕が出土し、新聞発表され話題となった。

平成4年度

上猿ヶ谷戸遺跡については、現道部分以外の買収が終了し、小畔川までの調査を実施することができた。10月までは鶴ヶ島市の4遺跡の調査を先行し、11月1日から3500㎡の調査を開始したが、人家の跡であったため攪乱が激しく、江戸時代の溝なども多数検出された。光山遺跡の標高と比べると7m低く、小畔川の直前まで遺構が続くことが判明した。また、今回の調査では、南側の台地上位部の遺構群よりもやや古い、七世紀代の住居跡が多く検出された。古墳時代の遺構としては、日高市では初めての発見となった。

平成5年度

今年度は既に未買収部分と、これに関連する遺構を除いて整理作業を開始していたが、一部昨年度からの継続調査と航空写真撮影が残ったので、これを実施した。約500㎡の現道部の調査については調整がつかず、今回の報告書にはこの部分の掲載が不可能になった。

遺 跡 名	平成元年度	2	3	4	5
○長 山 甲					
○西ノ久保					
○光 山					
○笹 原					
○上猿ヶ谷戸					
柳 戸					
横 田					
新 山					
整理報告書 ○印					

第1図 調査工程



第2図 遺跡位置図

4 発掘調査と整理の方法

光山遺跡群の調査は断続的に5年度にわたって実施され、整理も一部発掘と平行して行われるなど調査と整理を同時進行という方法が採用された。また、当初川越市光山遺跡と日高市上猿ヶ谷戸遺跡を別の遺跡として調査を進め、さらに用地買収の関係などで同一遺構を何度かに分けて調査することもあったため、整理の時点で遺構番号などを調整せざるを得なかった。以下に、光山遺跡群について報告書刊行までの記録として実施方法を概観しておきたい。

発掘調査

光山遺跡群は、周辺の首都圏中央連絡自動車道関係の多くの遺跡の地目が山林であったのと比べると一部に畑や陸田があり、表面観察で遺跡の時期や性格をある程度判断することができた。重機により表土除去を開始すると、表面採集による結果どおり奈良時代の竪穴住居跡が確認されたが、これらの遺構の検出状態が非常に良好であることが判明した。そこで、重機による表土掘削は最小限に止め、遺構確認が明確なソフトロームの上面から、遺物の出土地点を記録しながら人力で確認作業を進めた。これにより基本的には全ての遺物にナンバーが記されることになり、掘立柱建物跡に所属する遺物や、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の構造を考える上で貴重な情報を得ることができた。

調査は10mグリッドを採用して進め、遺跡の北西端をA-1グリッドとして、南北がA・B・C列、東西を1・2・3列とした。遺構の実測図は全てグリッド単位で記録することを基本としている。住居跡などは1/20、カマドや微細図は1/10とし、1グリッド終了後には常に現状を把握しておく必要から、1/200の全体図に記入していった。現場での測量は、確認面に1m方眼の水糸を張る方法と、一部の掘立柱建物跡や斜面では鍬り方測量を採用した。

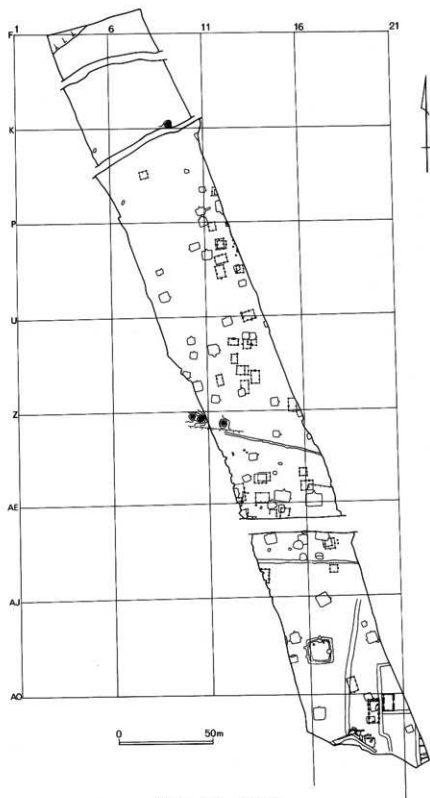
整理

平成5年度1年間の整理であったが、5年に及ぶ断続的な調査と遺跡名の統一により、遺構番号が混乱していたため、最初に遺構番号の整理と図面の合成から始めた。また、現地での調査も同時進行していたので、遺物や図面も調査終了まで数度にわたって搬入された。このため、現地調査の完了している遺構から整理を進めた。

土器の個体識別については全住居跡で行ったが、原則的には底部と胎土を基本として同一個体を抽出し、これに大形の口縁部と体部を参考に、最少になるように個体数を決定した。

遺構番号についてはこれまで述べたとおりであるが、土壌についてはその数が多く、混乱するため欠番としたものも多数ある。発掘と整理が同時進行したため、同時期に遺物の接合・図面修正・トレース・遺物実測・図版作成が行われ、広くない整理スペースを最大限に利用してこれらを実施した。また、遺物の分布図と接合関係については、記録としては全て作成したが、攪乱や調査の条件を考えて代表的・特徴的な遺構についてのみ本報告書に記載した。

調査開始から報告書刊行まで、調査と整理を同時進行しながら5年要したが、残念ながら日高市道部分の調査が予定どおり実施できず、本書の刊行に間に合わなかった。



第3図 グリッド配置図

II 遺跡の立地と環境

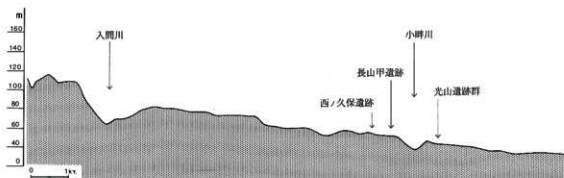
1 遺跡をとりまく自然環境

小畔川の右岸台地上の西ノ久保遺跡と長山甲遺跡、およびその対岸にある光山遺跡群の調査前の状況は大部分が山林となっており、一部が宅地・畑・墓地であった。山林は雑木林の他に杉と檜が植林されており、それほど奥の深くない林を形成していた。小畔川の南岸にはJR川越線と県道川越日高線が平行して走り、距離的には笠幡駅と高萩駅の中間に位置する。低地の幅は狭く水田面積もさほど広くはないが、県道に沿って店舗や宅地化が進み、小畔川も河川改修されている。首都圏中央連絡自動車道の路線沿線も、団地やゴルフ場などの開発が進みつつあるが、それでも山林が残り雉や野うさぎが走り回る、市街地近郊としては豊かな自然を残す地域といえる。しかし、自動車道が完成すれば周辺の開発をさらに促し、この僅かな緑もやがて消滅し、かん高い雉の鳴声が聞かなくなるのはそう先のことではないだろう。

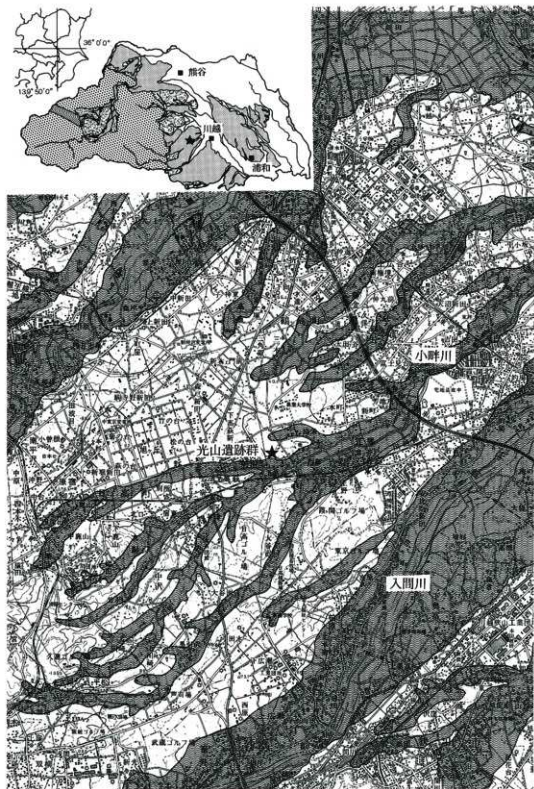
本書で報告する遺跡は、入間台地のいわゆる坂戸台地に立地し、光山遺跡群は小畔川左岸に、西ノ久保遺跡と長山甲遺跡は右岸に所在する。光山遺跡群は、小畔川に面した標高44~49mの南向きの斜面と台地上に位置し、長山甲遺跡はこの対岸の台地先端部で、西ノ久保遺跡は長山甲遺跡とは小畔川と南小畔川の間に入り込む谷の谷頭を挟んで南側に広がる。

この地域は一般の地図では起伏の少ない台地のような印象を受けるが小畔川や南小畔川に開折された小さな谷地形が形成されている。マクロ的には遺跡周辺縦断面模式図のように南から北へ傾斜しており、光山遺跡群の最も高い標高が約49m、西ノ久保遺跡で55mであり、入間川右岸から坂戸台地北東端までは、100m近い比高差が見られる。

小畔川は、約7km南西の高麗丘陵の宮沢湖（人造湖）を水源としており、JR高麗川駅付近で高麗川とは1km近くまで接近している。遺跡のやや下流では、下小畔川・南小畔川を吸収して、10km程北東で越辺川と合流し入間川に注いでいる。小畔川南岸の長山甲遺跡あたりまでは高麗丘陵から派生した丘陵的な様相で、北岸の平坦な台地が広がる地形とはやや趣が違っている。



第4図 遺跡周辺縦断面模式図



第5図 道跡立地図

2 光山遺跡群周辺の歴史的環境

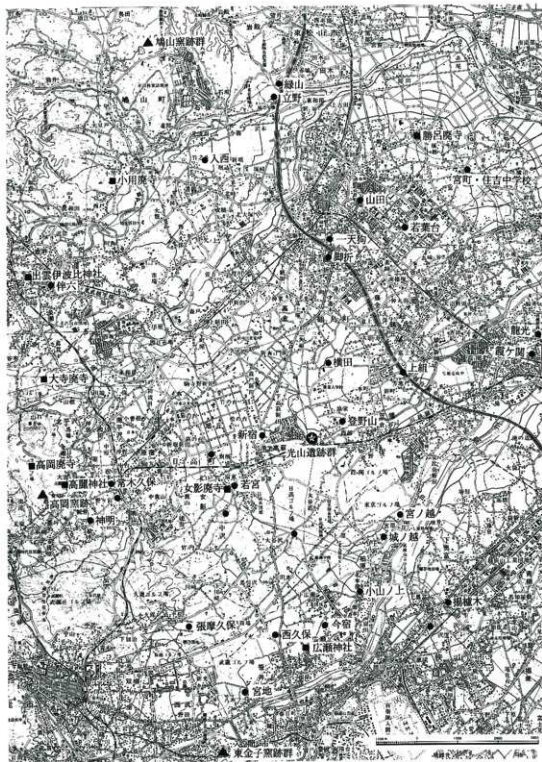
ここでは、本書の中心となる奈良時代と、その関連で平安時代までを中心とした、周辺の遺跡分布等について述べることにする。光山遺跡群の所在する川越市笠幡と日高市下高萩は、古代には高麗郡に属していたと考えられており、建郡時期が判明しているなど非常に興味深い地域である。

續日本紀によると、靈龜二年(716)五月十六日に高麗郡を置くという記事がある。重要な事項であるので、ここに原文を記しておく。『辛卯、以駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七國高麗人千七百九十九人、遷干武蔵國、始置高麗郡焉』これが有名な高麗建郡であるが、靈龜二年以前にも百済・高麗・新羅人を東国に配置した記述や、高麗若光の王姓に関する文献も見ることができる。当時の高麗郡の領域についてはいくつかの説があり、光山遺跡群を高麗郡内とは断定はできないが、可能性としてはかなり高いといえるであろう。高麗郡や入間郡の遺跡分布等については最近詳しい検討がされているが、ここでもこれらを参考に、高麗郡とその周辺で調査された遺跡を中心に見ていきたい。

遺跡の分布を概観すると、河川の流域を中心にいくつかのまとまりを見ることができる。入間川以南では、所沢市の柳瀬川流域に東山道武蔵路と推定される道路遺構が発見された、東の上遺跡を始めいくつかの遺跡が分布するが、数は多くない。柳瀬川から入間川までは大きな集落や遺跡群は確認されておらず、入間川右岸上流域で東金子窯跡群に至る。入間川の両岸には接するようにして奈良・平安時代の集落が並び、宮ノ越遺跡に代表される大きな集落も見ることができる。また、入間川は入間郡と高麗郡を画する郡境とも考えられている。右岸には、狭山市の揚榎木遺跡などが東金子窯跡群まで点在するが、荒川に合流するまでの下流域では中流域のような遺跡の連続性は見られない。左岸では、東金子窯跡群の対岸の宮地遺跡から、小畔川と越辺川が入間川に合流する地点に近い置ヶ関遺跡まで遺跡が連なり、遺跡密度の濃い地域を形成している。特に揚榎木遺跡の対岸に相当する、宮ノ越・城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡は時期的にも距離的にも関連を持った遺跡群で、宮ノ越遺跡では鈴の出土などから「駅」的な遺跡であると指摘されている。

また、小山ノ上遺跡では柵列や馬具などが検出されており、「牧」的な様相を伺うことができる。

入間川の北には小畔川が平行するように流れるが、この間には小畔川の支流である下小畔川と南小畔川が小さな流域を形成している。さらにこれらの支流に向かって谷戸が発達し、上流域では丘陵性の複雑な地形となっている。このため、広い平坦地は少ないが、谷に面した台地縁部には小規模な集落が点在している。南小畔川上流の飯能市張摩久保遺跡では、大型の建物群が調査されており、この流域最大の集落となっている。下小畔川流域でもやはり小規模な集落が見られるが、左岸には女影庵寺・若宮遺跡が広がり、高麗神社周辺とともに高麗郡では中核となる地域になっている。小畔川は源流である高麗峠東の宮沢湖から北上し、高麗川と1km近くまで接近した後、東流し、高萩付近で北東方向に進んで入間川と合流する。上流域は険しい地形で遺跡は分布しないが、左岸に女影庵寺を望むあたりから集落が連なるように出現する。下小畔川の右岸と小畔川に合流する付近の南岸は、低地に向かって崖面を形成しているため集落は発達せず、南緩斜面となる左岸には本遺跡と新宿遺跡、登野山遺跡が展開している。特に本遺跡は下小畔川の合流部に位置し、台地が小



第6図 光山遺跡群周辺の遺跡分布図

小畔川に向かって最も突出した部分に相当する。この一帯から下流は該期の遺跡は極端に減少する傾向にある。

小畔川と高麗川の間は起伏の少ない平坦な台地であるが、大谷川などの越辺川に注ぐ小河川があり、若葉台遺跡などもこの流域に位置している。この台地上には、若葉台遺跡、脚折遺跡群、勝呂廃寺を中心とした遺跡が分布しており、入間郡衙や郡寺をこれらの遺跡に比定する検討もされている。最近では脚折遺跡群の一天狗遺跡から『郷』の文字が書かれた漆紙文書が発見され、問題となっていた遺跡の性格に、新たな要素が加わった。また、若葉台遺跡の北には奈良三彩や『片牧』の墨書土器が出土した山田遺跡や、勝呂廃寺の東には『路家』の墨書土器、棹舂が出土した宮町遺跡が所在し、勝呂廃寺を中心としたこれらの有力な遺跡群は、入間郡の中核になるものであろう。高麗川の上流域は、高麗神社、高岡廃寺、大寺廃寺などの他、集落としては稲荷遺跡、神明遺跡が調査されている程度で、高麗郡の中心と考えられているが、郡衙あるいは郡衙の周辺集落と思われる遺跡は発見されていない。

高麗川の北の越辺川では、比企郡である左岸の丘陵に鳩山窯跡群が所在し、対岸には稲荷前遺跡を始めとした入西遺跡群が広がっている。この遺跡は古墳時代から中世にまで及ぶ集落で、『大里郡』『多摩郡』と墨書された土器や円面硯、帯金具などが出土しており、高麗川と越辺川に挟まれた地域では最も大きな遺跡である。入西遺跡群の対岸のやや上流には、八世紀代の小用廃寺があり、鳩山窯跡群を含めた三者は、郡を超えて有機的関連のもとに形成された広域遺跡群であろう。

このように、本遺跡の周辺には注目すべき遺跡が多く展開しており、東に2kmで女影廃寺に、6kmで高麗神社に至り、若葉台遺跡、脚折遺跡や霞ヶ関遺跡とも5～6kmの距離である。また東金子窯跡群と鳩山窯跡群のほぼ中間に位置しており、時期的な理由もあるが本遺跡の須恵器は確実なものだけでも九割以上が鳩山窯跡群の製品で、須恵器の供給ルートを考える上でも重要な地域である。武蔵国が東海道に所屬替えになる以前、東山道から武蔵国府に至る官道は東山道武蔵路と呼ばれ、そのルートについては諸説があるが、最近では本遺跡の東5km程を通過し、直線的に北上する説が有力である。しかし集落の分布を考えた時、北西の丘陵に沿った地帯の方が合理的であるし、さらに実際の通行にも有利であったことは、後の鎌倉街道（上道）が北西ルートを採用していることから指摘できる。本遺跡の馬具などの遺物を考えると、東山道武蔵路の存在は別としてもこの遺跡が交通の要衝に位置し、小畔川の水路とともに有力な陸路も通過していたと考えられる。

日高市ではこれまで古墳時代の集落は発見されておらず、今回の調査によって七世紀代の、しかも大型掘立柱建物跡を伴う集落が検出された。この事実は、高麗建郡以前に有力豪族などの存在を想定できるもので、この地域の古代史を考える上で新たな要素が加わったといえるであろう。さらに、八世紀代の豊富な土器類や希少な遺物群は、光山遺跡群の性格の一端を示すもので、農業を主要な生業とする集落ではない可能性を示唆するものである。現状では、遺跡の立地や遺構・遺物から、陸路・水路を含めた交通路の要衝に相当し、ここに発達した政治的な色彩をも帯びた集落を想定しておきたい。また、同様に集落の衰退・消滅も、交通路の変更を主因とした政治的・経済的な理由によるものと考えている。

III 遺跡の概要

1 調査成果の概要

光山遺跡群および長山甲遺跡・西ノ久保遺跡からは旧石器時代から近世に至る多くの遺構と遺物が検出されているが、概要については各遺跡で扱うので、ここでは時代別に検出された遺構数を記しておく。

光山遺跡群

笹原地区 縄文時代 土壇1・時期不明 溝1

光山・上猿ヶ谷戸地区 旧石器時代 石器・縄文時代 土壇5

古墳・奈良時代 竪穴住居跡55 掘立柱建物跡40 井戸3 土壇12 溝3
中・近世 塚2 竪穴状遺構1 土壇13 溝3

西ノ久保遺跡 縄文時代 土壇23 包含層2・中世 土壇12 溝1

長山甲遺跡 縄文時代 土壇50 集石4 時期不明 溝1

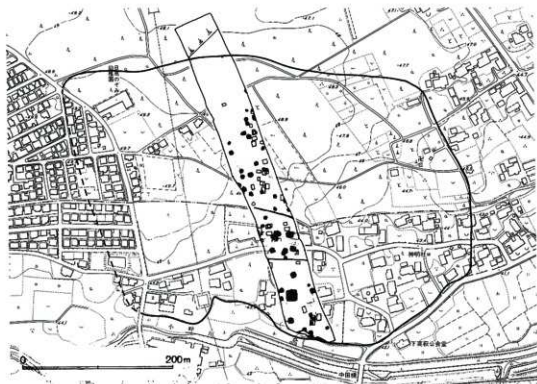
2 光山遺跡群の奈良時代集落の広がり

今回の調査は、結果的には幅50mほどのトレンチを南北に設定するかたちとなったため、遺跡の南限と北限については実際の発掘によって確認することができた。本書の中心となる光山遺跡群も南は小畔川によって明確に線引ができ、北は小さな谷によって笹原遺跡と対峙し、その限界が分かる。そこで東西の範囲については、表面観察は実施しているが、宅地の進出と森林の存在により遺物の採集できる地目は少なく、地形図などを参考に遺跡の広がりを考えてみたい。

地形図によると、北の谷は南に弧を描くようにして小畔川に合流しており、最大限遺跡が東進するとしても、ここを一つの限界と考えることができるだろう。そして、この地点には現在は川越西高校となっている、登野山遺跡が所在する。この遺跡も光山遺跡群と同時期の集落であるが、本遺跡とはやや距離があり、この間の地域には殿ヶ谷戸・笹ヶ谷・久保という字名が残り、鎌倉街道が南北に走っている。川越市遺跡地図には光山・猿ヶ谷戸遺跡として光山遺跡群に連続する遺跡は記載されているが、ここで一旦遺跡は途切れるのであろう。西については、団地の存在により視覚的にも区別を付けることはできない。しかし、土壤図によると、高倉統と呼ばれる黒ボク土壌が小畔川から北の大谷川まで南北に繋がっており、現状でも高倉統の西に旭ヶ丘川という廃水路が流れている。高倉統は周辺に点在するが、これまで該期の遺跡の立地は知られていない。この旭ヶ丘川西岸には同時期の新宿遺跡も所在し、さらに西に遺跡群の分布が始まることから、この高倉統以東に光山遺跡群の西限があると考えられる。現状では日高団地により西限は確定できないが、舌状に伸びる台地の限界や低位部の表面採集から団地の東端が一部かかるような広がりを想定できよう。

表面観察とこれまでの発掘調査の成果に加え、以上のような地形・地質・地名の検討から想定したのが光山遺跡群範囲図であり、南北400m、東西500m程の範囲となった。南北は地形によって、東西も地質や微地形によって区画され、東にはのちに鎌倉街道奥州道・柏原街道などと呼ばれる道

が南北に走っている。このようにして遺跡の範囲を見ると、小畔川に向かって周囲の地形より100m程突出した南向きの低台地と、その上位の台地平坦面に集落が展開している様相を看取することができるのである。また、ここは下小畔川が小畔川に合流する地点のやや上流に位置しており、鎌倉街道堀兼道の存在からは、渡河地点としての位置付けも考えられよう。



第7図 奈良時代集落の広がり

3 土地利用の変遷

光山遺跡群の特に川越市側は、遺構の保存状態が非常に良好であったが、これは奈良時代の集落跡以後には僅かに中・近世の塚や竪穴状遺構が存在するのみで、現代まで人の手がほとんど入らなかったことが大きな要因であった。おそらくは、八世紀の後半に集落が廃絶し、この一帯から再び開発の槌音がするのは、中世以後のことで、この間数百年は森になっていたであろう。長山甲遺跡・西ノ久保遺跡についても、旧石器・縄文時代以降の遺物は中世であり、考古学的にはその間の開発の証明はできない。

光山遺跡群で最も古い遺物は、4点のポイントで、つづく縄文時代には石鏃が10数点と前期の土器及び落とし穴が検出されている。このように狩猟道具と施設だけが発見され、積極的に近接して集落が存在するような想定はできない。つまり、旧石器時代から縄文時代にかけては、この周辺は狩猟空間であったと考えることが妥当であろう。その後、七世紀になると小畔川に面した台地低位

部に突然大型建物を伴う集落が出現し、時期と共に徐々に台地を上がる傾向を見せつつ、八世紀後半まで存続する。この集落の住人達は、遺物から見ても農業を主たる生業にしているとは考えられない点も多く、小畔川の渡河地点のような交通の要衝で、しかも流域の中心となる集落であったと考えられる。集落の消滅にも、交通路の変更や政治的な動向が強く影響している可能性を想定できるかもしれない。また、台地平坦部の調査区の東には光山古墳と呼ばれるマウンドがあり、現状では直径約30mの円墳で、盗掘坑が見られる。現状は雑木林となっており、表面採集や地形の細かな観察は不可能であるが、マウンドは低く盛土は軟弱であり、積極的に古墳であるとする根拠に乏しい。しかし、七世紀の大型住居や掘立柱建物跡の存在、そしてこれらを見下す立地を考える時これが古墳であるか否かは非常に重要な問題である。

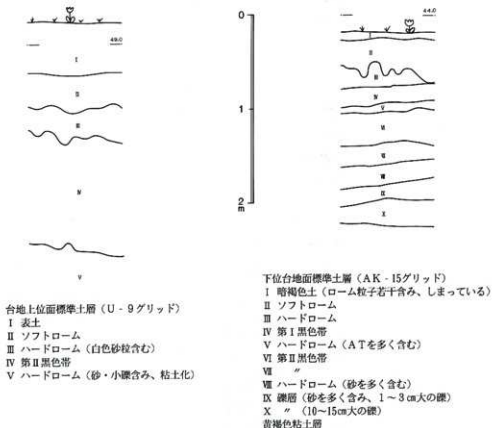
八世紀後半を過ぎると集落は途絶え、以後中世まで四百年以上の空白の期間がある。中世になると、遺構では竪穴状遺構、遺物では青磁があり、今回調査区の東隣には館跡と思われる堀が巡り、さらに東には金毘羅大権現の名の付いた小さな堂がある。この堂の傍らには江戸時代の墓石に混じって延文六年の板碑と五輪塔が並んでいる。また、調査区に接するように、小さな祠だけの日枝神社が鎮座し、これがすぐ脇に移転する際実見させて頂いたが、庚申塔と宝篋院塔の一部が御神体となっていた。今回の調査対象でもあった塚は、日枝神社を中心に分布しており、遺物は出土しなかったが、ほうそう(瘡瘡)様と呼ばれる神社境内の小社は塚の上にある。また、遺跡の東400mを南北に走る道路は、鎌倉街道あるいは柏原街道とも呼ばれる古道と考えられ、ルート沿線には中世館跡も多く分布している。

江戸時代には、小畔川に面した上猿ヶ谷戸遺跡地区に農家と墓地がつくられ、現在の家並みの原形が整えられていった。調査でも、この地区からは近世遺物が多量に出土しており、川に面して農家が、その北の斜面には墓地が造られている。今は霊園風に整備されているが、江戸時代の墓は島村家と比留間家のものである。台地平坦部は、調査以前は陸田と畑であったが、この開墾は終戦後ということなので、墓地の背後は深い森となっていたのであろう。小畔川に南面して農家が東西に並ぶが、これに混じって神明社・天満神宮・馬頭観音といった祠が点在し、前述の金毘羅大権現脇の墓石の一つには、川越中門院徒の光明寺の銘を見ることができる。地名については、新編武蔵国風土記稿によると、高麗郡笠幡村の猿ヶ屋戸と下高萩村の猿ヶ谷戸に相当し、現在の遺跡の字名である光山や山王は記されていない。明治期も基本的な土地利用は江戸時代と大きく変化していないであろうが、台地奥部の所有者不明の山林を周辺住民で分割し、その後檜や杉の植林を始めたようである。ここは地元では字名とは異なる、分割の名残りである割山という俗称で呼ばれている。

現在では、このような古い顔を持った農家のすぐ隣に、区画整理された住宅地が増殖し、工事中の首都圏中央連絡自動車道が残された少ない森を分断している。あと数年で近くにインターチェンジができるが、景観を含めた周辺の土地利用はさらに大きく変貌していくであろう。

4 遺跡の基本層序

光山遺跡群および西ノ久保遺跡と長山甲遺跡は所謂ローム台地に立地するため、その層序は基本的には表土、ソフトローム、ハードロームと単純である。しかし、光山遺跡群に於いては、7m近い比高差のある上位台地と下位台地とでは堆積の状態も大きな差が見られ、上位台地では表土下3mまでローム層が観察できるのに対して、下位台地では1.5m程で礫層に至る。また、斜面部では表土とソフトロームの間に暗褐色土が発達しており、これが遺構確認面となっている。この土層は縄文土器を包含する層で、前期の土器片が出土しているが、掘り下げて精査したものの遺構は検出できなかった。



第8図 標準土層図

Kouzan

光山遺跡群



IV 光山遺跡群の遺構と遺物

光山遺跡群からは、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発見されているが、中心となるのは奈良時代であり、ここでは奈良時代とその他の時代の二つに章を分けて扱った。なお、遺跡の連続性から七世紀の遺構なども奈良時代に含めて記載した。

1 奈良時代の遺構と遺物

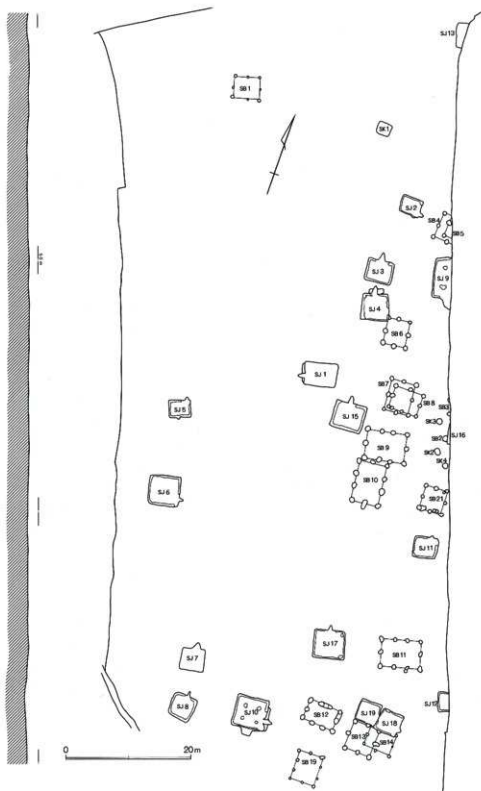
光山遺跡群の主体となる奈良時代は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心に、多くの遺構と土器類を始めとした遺物が検出されている。これらの遺構と遺物は時期的にも七世紀中葉から八世紀後半までの比較的短い期間に限定されるが、この時期の集落としては県内でも有数の規模と内容を示すものとなった。特に、平安時代に継続しない集落遺跡という点を含め、竪穴住居跡に近い数の掘立柱建物跡の存在や、これらの遺構の規則的な配置、あるいは馬具を始めとした豊富な遺物は、この遺跡がこの周辺の集落群の中心となる可能性を示唆している。高麗郡という、性格や建郡時期が文献によって判明している地域であることも、この遺跡を考える大きな要素となるであろう。

調査区は南北に長く、50～60m幅で台地を縦断するように、ほぼ遺跡の中央にトレンチを設定するような状態となった。このため、遺跡の東西の広がりは掴めなかったが、北限と南限を確認することができた。北限となる小さな谷のやや内側から、現在の小畔川まで約400mにわたって集落は続き、視覚的にはいくつかの群を形成するが、集落を区切るような空白はない。地形的には小畔川に面した、標高43mから44mほどの緩傾斜面と、ここから標高49mまでの斜面部、そして川越市分属する台地の平坦面に分けることができる。前述したように、現在の行政区分に従って台地平坦部を光山遺跡とし、これ以南小畔川までを上猿ヶ谷戸遺跡としたが、行政上の違いや地形によって連続するこの遺跡を分割することは合理的ではなく、一括して扱った。

調査の結果、該期の遺構は竪穴住居跡55軒・掘立柱建物跡40棟・井戸跡3基・土墳基・溝跡3条を検出できた。これらの遺構は重複も少なく、部分的な攪乱がある他は全体的には保存状態は良好で、特に台地平坦面の住居群は奈良時代以降の開発の痕跡はほとんどなく、ソフトローム直上で遺構確認が実施できたため、棚状遺構や掘立柱建物跡に伴う炉跡などに関するいくつかの情報を得ることができた。

遺物に関しても、馬具や「馬」「鞍」の墨書土器、あるいは全国でも十数点が確認されているに過ぎない鍵の出土は、遺跡の性格を暗示するもので、本遺跡の周辺を通過しているであろう、東山道武蔵路との関連など重要な要素を内包している遺跡と言える。また、日高市では七世紀代から継続する集落の最初の発見で、これまで考えられていた高麗建郡との関係についても再考の必要があるだろう。

以下、北側から竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土墳・溝状遺構の順に遺構・遺物の調査内容を述べていく。

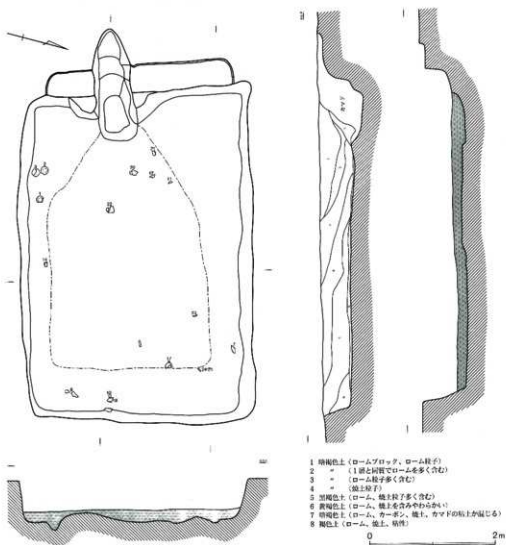


第9圖 奈良時代遺構分布圖 No.1

1号住居跡

Q-10グリッドに位置し、主軸方向はN-106°-Sを指す。プランは東西に長い長方形を呈し、規模は5.3m×3.77mで深さは最深部で55cmである。覆土は東側からを中心とした自然堆積で、東側には竪穴住居跡や掘立柱建物跡が隣接しており、西側には遺構のない空白が広がる。床面はほぼ平坦な貼床で、中央部からカマド前面にかけて堅緻である。壁溝と柱穴はないが、カマド両脇に深さ10cmほどの段が検出されたが、位置や他の住居の状況から考えると棚の機能を想定することができ、棚状遺構という名称を用いることにした。

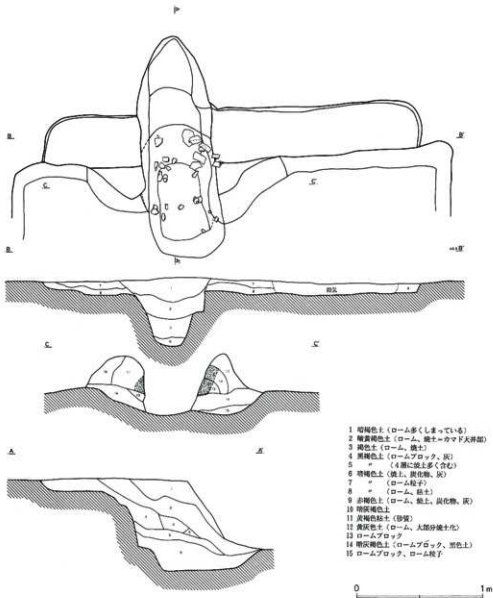
カマドは西壁の南よりにあり、全長135cm、掘り込みの最大幅は55cmで褐色系の粘土を主体に袖や天井部を構築している。袖の内壁は焼土化し、煙道部は急角度で立ち上がり、住居外から暖やかになる。焚口は浅く掘り込まれ、4層が器設部に相当する。



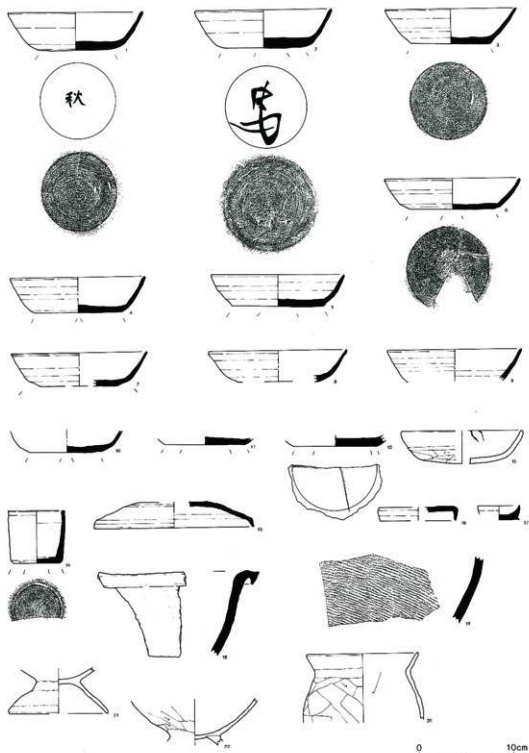
第10図 1号住居跡

住居の掘り方は、床面中央付近を高く、壁際を不規則にやや深く掘り、ローンを主体として土を10～20cm埋め戻して床面としている。

出土遺物は、カマドや床面から出土したこの住居に伴うものと、東側から流入した覆土出土があり、1・2・3・5などは前者で、6～8などは後者である。土器の個体数は43個体で、土師器7個体、須恵器36個体と圧倒的に須恵器が多い。また、須恵器環が24個体と高い比率を示している。1は底部外面に『秋』、2は不明瞭であるが『馬』と読める墨書がある。23～25は刀子の破片で、23は肩部先端が欠損するが関から刃部に湾曲し、24と25は基部で、25には木質が付着している。



第11図 1号住居跡カマド



第12圖 1号住居跡出土遺物(1)



第13図 1号住居跡出土遺物(2)

1号住居跡出土土器観察表

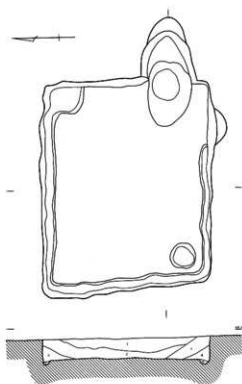
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	14.5	4	8.2	DEH	I	5	70%	床直、底部外面墨書「秋」、RA
2	坏	14.5	4	8.8	ABFH	II	4	100%	床直、底部外面墨書「馬」か、LBa
3	坏	13.9	3.7	8.4	ABFH	I	7	100%	床直、RA
4	坏	(14.3)	3.7	9.2	ABH	I	6	60%	上・中層、RBa
5	坏	(14.1)	3.3	9.8	ABFH	II	4	30%	カマド、RBb
6	坏	14.4	3.3	8.9	ABH	II	5	80%	床上7cm、RBa
7	坏	(14.5)	(3.5)	(8.3)	A~CFH	I	7	35%	下層、RB
8	坏	(14.7)			AB	I	6	35%	下層
9	坏	(14.3)			A~DFH	I	4	40%	上・中層
10	坏			7.3	ABH	III	4	底部	上・中層、RBa
11	坏			8.6	ABH	I	7	底部	床上7cm、LBb
12	坏			9	A~CH	III	7	底部	へら記号、RBb
13	坏	(13.0)			A~CFH	I	1	20%	上層
14	コップ形	6.0	5.5	4.9	DEH	I	7	50%	床直、R
15	蓋	(16.9)			ABEGH	I	7	30%	上層
16	蓋	(8.5)			BCFH	III	7	25%	上層
17	蓋	4.3			BFH	I	6	つまみ	下層
18	甕				BCH	I	6		下層
19	甕				ABH	II	5		上層
20	甕	(11.9)			ABCFH	II	1	口縁	床上10cm
21	台付甕			(10.6)	A~CF	I	4	台部	床直
22	台付甕				A~CF	II	4		床上3cm

2号住居跡

N-10・11グリッドに位置し、主軸方向はN-90°-Eと東西を指している。プランは菱形に近い長方形を呈し、規模は東西3.4m南北2.75mで深さは35cmを測る。床面はほぼ水平であるが、特に堅緻な部分はなく、掘り方面から5~10cmの貼床をしている。壁溝はカマド周辺を除いて巡り、南西コーナーに径40cmの浅いピットがある。

カマドは東壁の南よりに造られ、全長160m最大幅90cmで、壁外に約90cm突出している。層序は単純で、袖部や天井部は残存しておらず、器設部の復元なども不可能である。

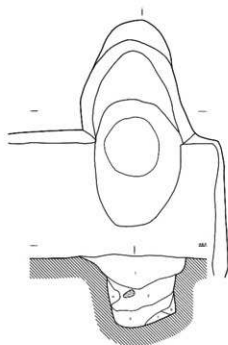
出土遺物は少なく、須恵器20点、土師器8点のみで接合により、合計22点となった。土師器は甕の胴部破片だけで、須恵器は坏・蓋などである。



- 1 赤褐色土（ローム、黒色土）
- 2 暗褐色土（ロームブロック、炭化物）
- 3 = （2層と同質でやや暗い）
- 4 褐色土（ロームブロック）
- 5 黄褐色土（ロームブロック、やわらかい）
- 6 暗褐色土（焼土、ローム）
- 7 = （焼土、ローム）
- 8 褐色土（焼土多く含む）

0 2m

第14図 2号住居跡



- 1 暗褐色土（焼土、ローム）
- 2 = （焼土ブロック）
- 3 暗黄褐色土（焼土粒子、ロームブロック）
- 4 = （ローム、粘土）
- 5 褐色土（粘土粒子）
- 6 暗褐色土（ロームブロック）
- 7 暗黄褐色土（焼土化したロームブロック）
- 8 褐色土（焼土粒子多く含む）
- 9 暗黄褐色土（焼土、ローム）

0 1m

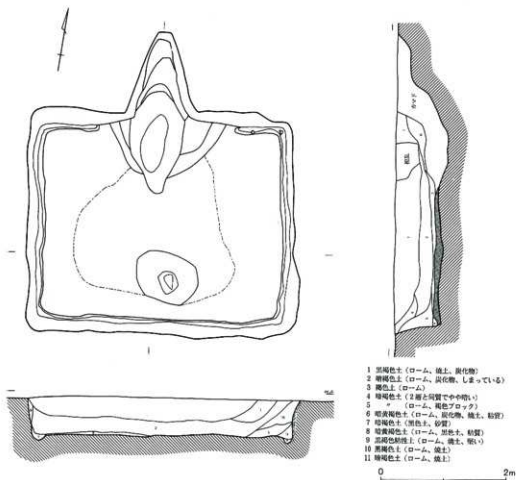
第15図 2号住居跡カマド



第16図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(16.5)	(4.0)	(10.0)	ABFH	Ⅲ	4		カマド、RA
2	坏			(10.4)	BH	I	5		LA
3	坏	(14.6)			A~CH	Ⅲ	6		



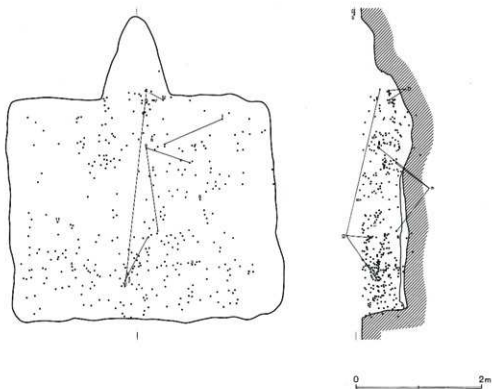
第17図 3号住居跡

3号住居跡

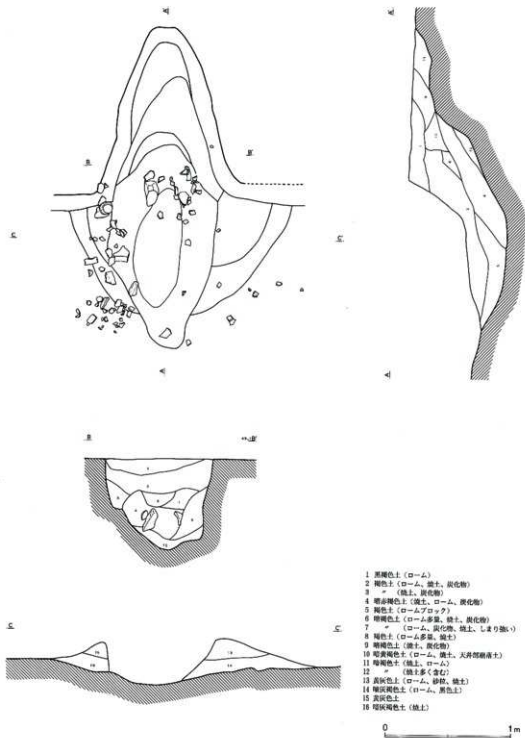
O-10・11グリッドに位置し、主軸方向はN-6°-Wを指す。プランは東西にやや長い長方形を呈し、南北3.5m東西4.25mで、深さは約60cmを測る。床面は平坦でカマド前面から中央にかけて堅緻に踏み固められ、厚さ10cm程の貼床である。壁溝はカマドの部分を除いて巡る。南壁側にはカマドに相対するように径30cm、深さ20cmのピットがあり、この周囲には堅緻な周堤状の高まりが巡っている。位置や構造から出入り口に関わる梯子穴であろう。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁側の一部が火を受けて焼土化している。

カマドは北壁中央にあり、全長250cm、焚口幅50cmで床面からの掘り込みは約25cmである。袖部は灰褐色系の砂粒を含む土を使用しており、4・5層が火袋部になるだろう。4層中に長さ20cm程の砂岩が立っており、支脚であろう。

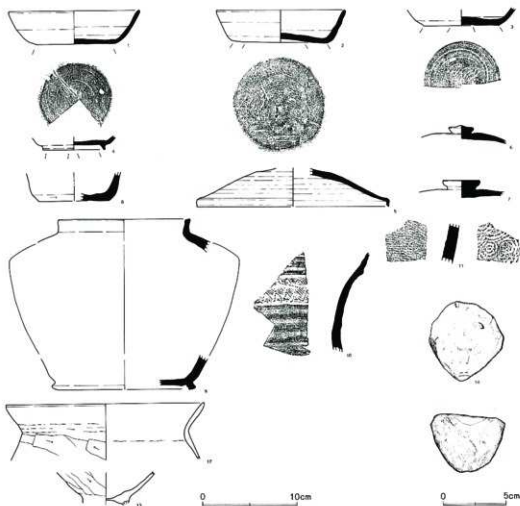
遺物はカマド・床面・覆土から約400点が出土しているが、個体識別の結果は30個体となった。須恵器は坏15・高台坏1・蓋7・甕1・壺1・短頸甕1で土師器は甕3・台付甕1である。2はカマド右袖上から出土している。14は覆土出土の軽石で、表面に条痕がある。重さは約89g。



第18図 3号住居跡遺物分布図



第19図 3号住居跡カメラド



第20図 3号住居跡出土遺物

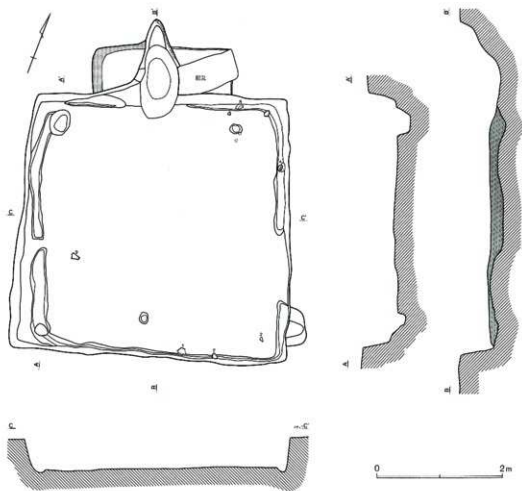
3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.9)	3.5	8.0	BDH	I	5	45%	中層、RA
2	坏	13.6	3.4	10.0	BH	II	6	100%	カマド、RBb
3	坏			(8.0)	B	I	5	底部	床上7cm、RBa
4	高台坏			(6.6)	AEH	II	7		上層
5	蓋	(20.4)			DEFH	II	6	25%	下層、天井部寛削り
6	蓋	(8.9)			BH	I	5	30%	上層
7	蓋	(9.0)			BDH	I	5	20%	カマド
8	甕			(7.5)	BGH	I	7	底部	上層
9	短頸壺	(14.0)		15.2	EG	I	5	20%	床上7cm
10	甕				D	I	5	口縁	上層
11	甕				DH	I	5	胴部	上層
12	甕	(21.0)			BCE	I	4	口縁	上層
13	台付甕				BDF	II	3	台部	覆土

4号住居跡

3号住居跡の南に接するように位置し、南東コーナーで6号掘立柱建物跡と重複している。重複部分が僅かで、遺構確認時には新旧は判断できなかった。主軸方向はN-20°-Wを指し、規模は東西4.1m南北4.3mの方形プランを呈している。床面は水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はカマドと東西の壁で一部途切れている。また、西壁で壁の立ち上がりと壁溝が若干一致していない。小ピットが3穴あるが柱穴ではない。カマド両脇に棚状遺構があり、東側は攪乱により大部分が破壊されているが、西側には壁に沿って粘土が貼られているのが確認できた。さらに完形に近い須恵器環が伏せられた状態で出土しており、物置としての棚上遺構の性格を裏づけられよう。本住居跡も床面は貼床で、掘り方面は中央が高く、壁際が深く掘られ、さらに四隅は土壇状に掘り込まれている。

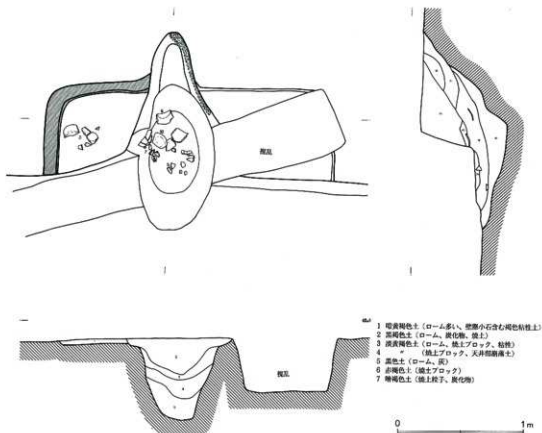
カマドは北壁中央部にあり、全長155cm焚口幅55cmで床面からの掘り込みは20cmである。袖部は残存していなかったが、4層が天井の崩落土で7層が煙道部に相当するであろう。支脚には片岩系の



第21図 4号住居跡

石が使用されている。

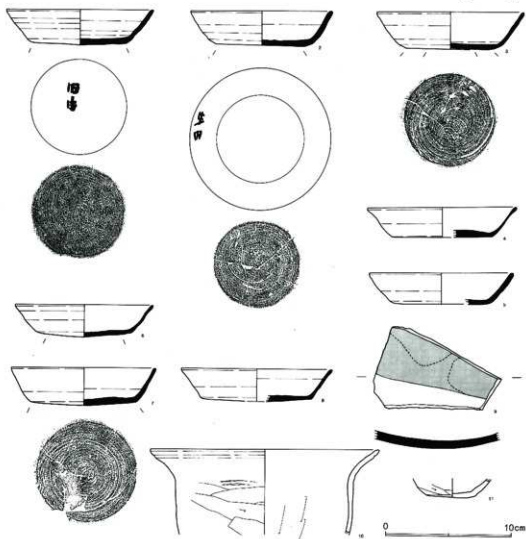
出土遺物には床面から『内生』『生内』と読める2点の墨書土器と、朱墨痕もある転用碗が1点ある。3には内面に漆が付着していた。総個体数は12で須恵器坏9点・蓋2点・土師器甕1点と須恵器甕の小片が数点である。



第22図 4号住居跡カマド

4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.6)	3.7	9.9	BE	II	7	60%	床直、底部外面墨書「内生」、RA
2	坏	15.1	3.6	9.3	BEH	II	5	95%	床直、体部外面墨書「生内」、LA
3	坏	15.6	4.7	9.7	DEH	I	6	70%	棚、LBb、漆付着
4	坏	(15.7)			EH	I	5	55%	床直
5	坏	(15.2)			ADEH	II	7	30%	カマド
6	坏	14.5	3.4	8.0	EFH	II	4	50%	カマド、RA
7	坏	15.3	4.0	11.1	DEH	II	6	75%	カマド、RA
8	坏	(16.0)			EFH	II	9	40%	床直
9	転用碗					I			床直、頸部破片、一部朱墨有
10	甕	(24.3)			CDF	II	4	口縁	カマド
11	甕			(4.8)	ACE	II	4	底部	カマド



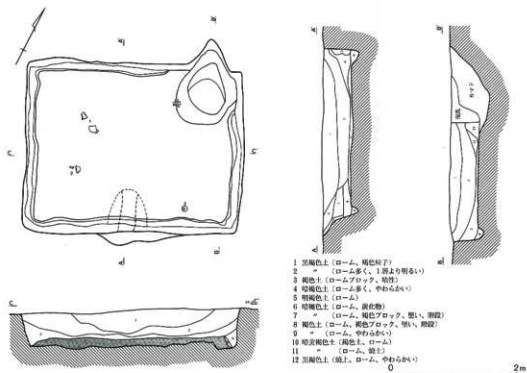
第23図 4号住居跡出土遺物

5号住居跡

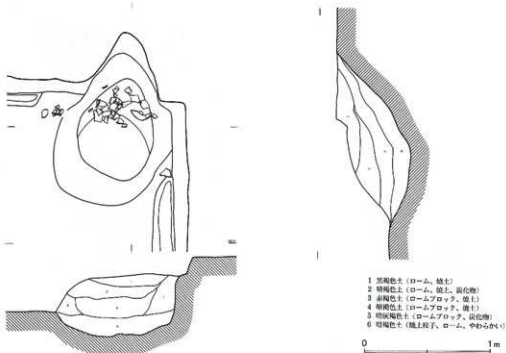
光山遺跡群の中では最西端に位置する住居跡で、6号住居跡と共に他の遺構群とはやや離れている。主軸方向はN-25°-Wを指し、規模は東西3.5m南北2.8mで深さは50cmを測る。床面は特に堅緻な部分はないが平坦で、壁もほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はカマド部分を除いて巡り、ピットはない。南壁の中央部に幅50cm厚さ20cm程の堅くしまった高まりがあり、内側に向かってやや傾斜している。下に壁溝が走っているが、位置からは出入口に関係する階段状の遺構と考えられる。

カマドは北壁の東端にあり、全長140cm最大幅90cmで、床面から15cm掘り込まれ、5・6層が袖部の残存と思われる。

遺物は、全て床面かカマドから出土しているが、図示したもの以外は小片で、須恵器坏片が7点と甕2点及び土師器甕1個体分の破片である。2は小型蓋のつまみ欠損後に硯に転用したもので、摩滅した面の他に墨痕が残存している。



第24図 5号住居跡



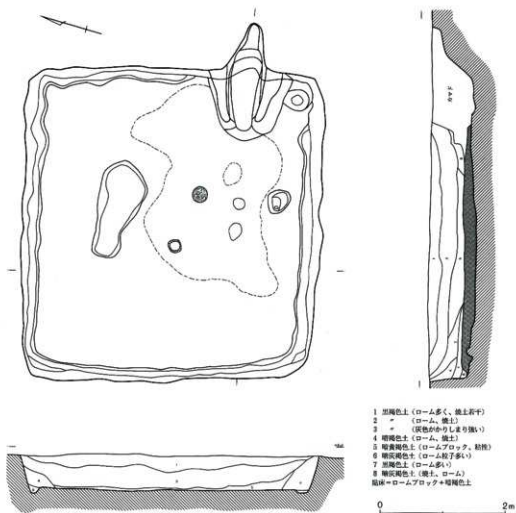
第25図 5号住居跡カマド



第26図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	蓋	17.8	4.0		EH	I	5	100%	床直、R
2	転用碗	(8.2)			BEH	II	5	90%	床直、蓋
3	長頸瓶				DEGH	I	5	頸 部	床直

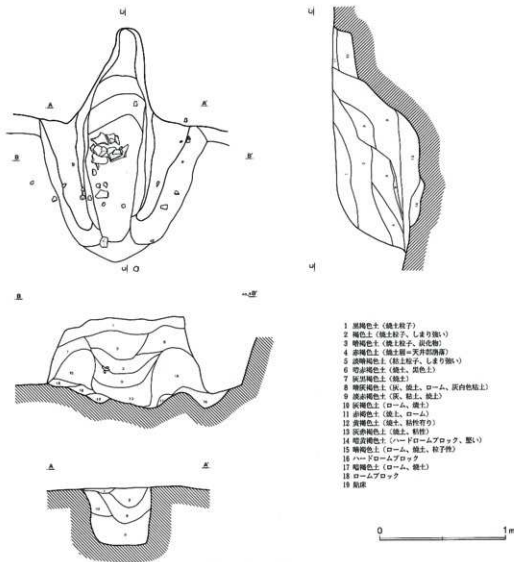


- 1 黒褐色土 (ローム多く、焼土若干)
- 2 " (ローム、焼土)
- 3 " (灰色がかりし厚い)
- 4 暗褐色土 (ローム、焼土)
- 5 暗褐色土 (ロームブロック、粘性)
- 6 暗褐色土 (ローム粒子多い)
- 7 黒褐色土 (ローム多い)
- 8 暗褐色土 (焼土、ローム)
- 局所→ロームブロック+暗褐色土

第27図 6号住居跡

6号住居跡

5号住居跡の南約10mのS・T・8・9グリッドに位置し、主軸方向はN-75°-Eを指す。規模は東西5m南北4.8mの方形を呈し、深さは60cmである。壁溝はカマド部分を除いて廻り、カマド前面から中央部にかけて堅緻な床面が広がる。この堅緻な部分に直径20cmほどの炉が2基並ぶが、このうちの1基は周辺が還元して青くなり、硬化していた。炉の南側には浅い小ピットが3穴と北側には深さ30cmの楕円形の土壌がある。炉及び周辺の土を洗浄し、観察した結果、鍛冶炉の破碎した残片と鍛造剥片が検出できた。これらの鍛造剥片は厚さ0.09~0.4mm程で、鍛造の最終に近い過程あるいは小鍛冶段階と考えられる。また、カマドの北脇には30×20cmほどの大きさの、台石あるいは叩石とおもわれる鉄が付着した砂岩が床面から若干上で出土しており、これらのことからこの住居跡が鍛冶遺構であることを確認した。

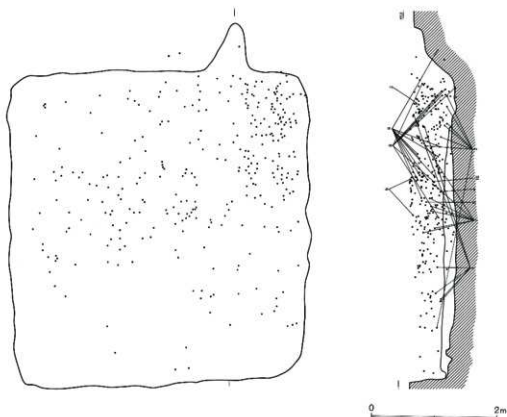


第28図 6号住居跡カマド

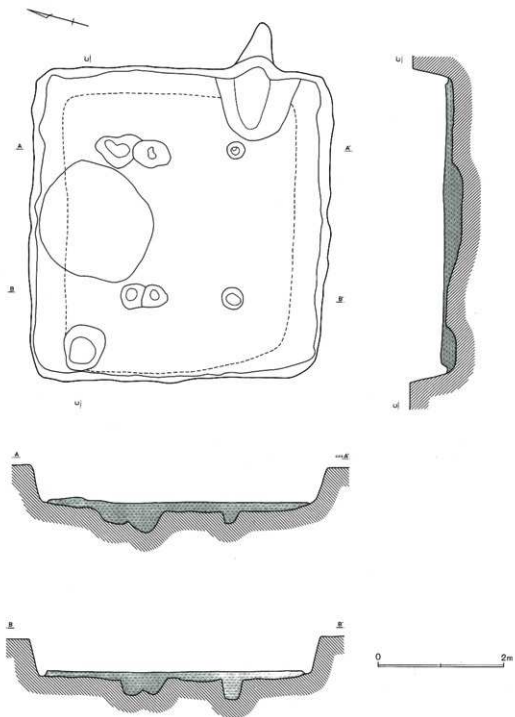
カマドは東壁南よりに構築され、全長185cm焚口幅25cmを測る。3・8層が天井部崩落土で袖部は粘性のない暗褐色土を使用し、内壁は焼土化している。煙道は9層に相当し、急角度で立ち上がる。

貼床は全面に及び、貼床下から柱穴と北西コーナーで貯蔵穴状の土壌を発見できた。柱穴は各コーナーに沿って配置され、北壁側は建て替えられている。この柱穴の間には直径2m近い円形の浅い落ち込みも確認できた。これらの柱穴は床面では確認できなかったことから、拡張前のものと考えることができる。北西コーナーの貯蔵穴状の土壌も同様の状況であることから、拡張前の規模はおおよそ点線のようになるだろう。

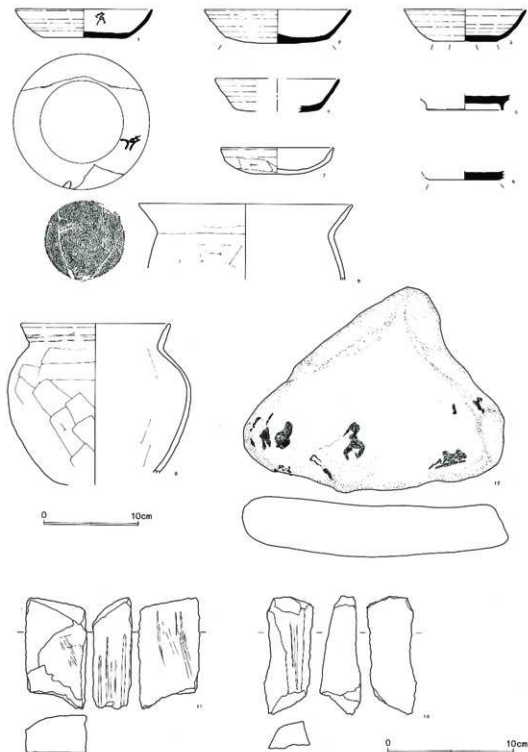
遺物は約350点出土しているが、特に鍛冶関連のものとしては、砥石が2点と先に述べた鉄の付着した砧(台石)12がある。1は床直出土の墨書土器で、体部の内外面に書かれているが、文字は判読できない。2も本住居跡に伴う須恵器で、3は覆土上層から出土している。須恵器は坏7点・高台坏1点・鉢1点と甕の胴部破片である。土師器は坏3点・甕2点・台付甕1点である。



第29図 6号住居跡遺物分布図



第30図 6号住居跡掘り方



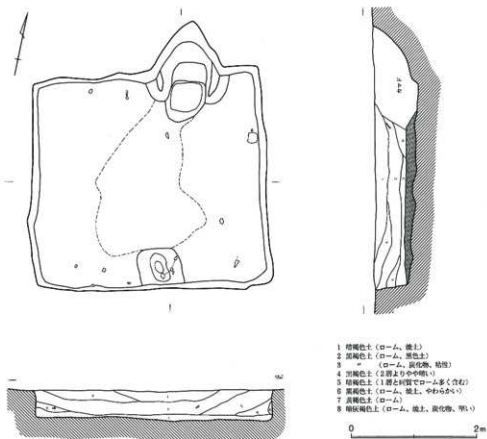
第31图 6号住居跡出土遺物

6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.6)	3.0	8.2	A~CFH	II	6	70%	床上5cm、口縁部内側外面墨書文字不明
2	坏	(15.5)	3.6	11.0	ABFH	II	5	30%	床上7cm
3	坏	(12.8)	3.4	6.8	ABFH	I	5	60%	上層
4	坏	(13.2)	残存高 1.5		BFH	I	7		床上6cm
5	高台坏			(8.2)	BCFH	I	5		上層
6	坏		2.8	(7.4)	A~CFH	III	4	底部	上層
7	坏	(12.0)			A~CH	II	3	40%	下層
8	台付甕	16.0			ABFH	I	1	口縁	床直
9	甕	22.7			A~CFH	II	3	口縁	床上8cm

7号住居跡

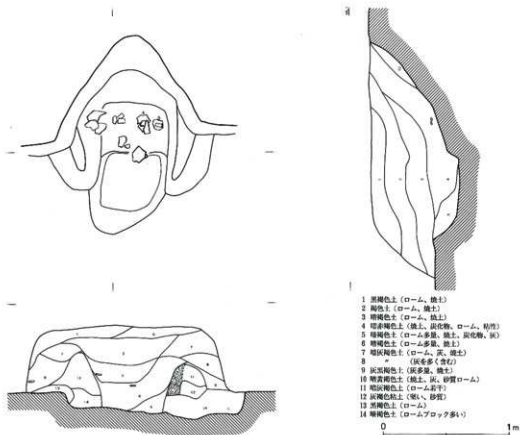
V-10グリッドに位置し、主軸方向はN-19°-Wを指す。規模は3.7×3.5mのほぼ方形を呈し、深さは最深部で50cmである。ロームブロックを主体とした貼床は平坦で、カマド全面から南壁のビットまで堅緻である。壁溝はないが、カマド対面に周堤帯をもつ小ビットがあり、位置や床面堅緻範囲の広がりから、出入口関連の施設であろう。



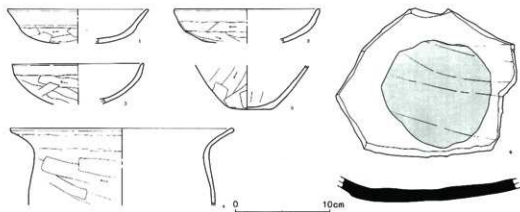
第32図 7号住居跡

カマドは北壁の東よりにあり、全長160cm、焚口幅55cmで灰褐色土を袖にしている。4層が燃焼部と煙道部に相当し、5層が焚口部となるだろう。

遺物の多くは床面やカマドから出土しており、須恵器は転用硯を含めて数片しか検出されていない。土師器は坏類4個体と甕1個体である。



第33図 7号住居跡カマド



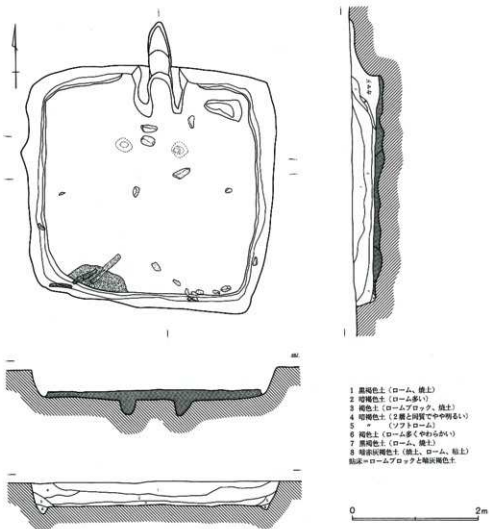
第34図 7号住居跡出土遺物

7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	(14.9)			ACDE	II	4	25%	床直
2	皿	(15.4)			ACEF	II	4	35%	床直
3	坏	(13.9)			CDEH	II	3	25%	床直
4	甕	(23.7)			ACEF	I	4	口縁	カマド、5と同一個体
5	甕			(4.5)	ACEF	I	4	底部	カマド、4と同一個体
6	転用硯				DEH		9	胴部	床直、甕胴部

8号住居跡

7号住居跡の南3mほどに並ぶように位置し、主軸はほぼ真北を指している。プランはほぼ方形を呈し、規模は3.9×3.8mで、深さは40cmと本遺跡の中では浅い部類である。壁溝はカマドを除いて廻り、北東コーナーに深さ26cmの不整形の貯蔵穴がある。床面は平坦で、カマド前庭の貼床下で

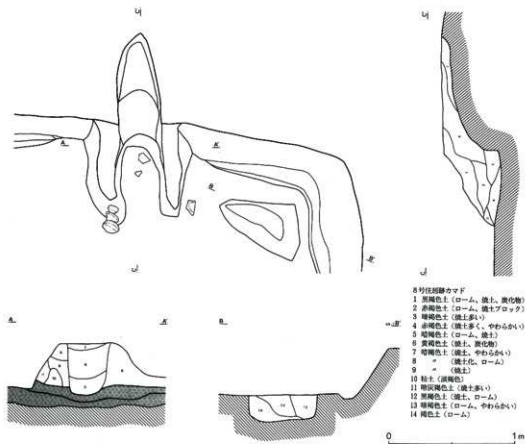


第35図 8号住居跡

一対の小ピットが検出された。南西コーナーに焼土の堆積と炭化材が集中しており、覆土中にも焼土が含まれていることから、火災住居であろう。

カマドは北壁中央にあり、全長140cm、焚口幅約30cmを測る。暗褐色土を袖に使用しており、2層は天井部の崩落層で、6層が煙道に相当するであろう。

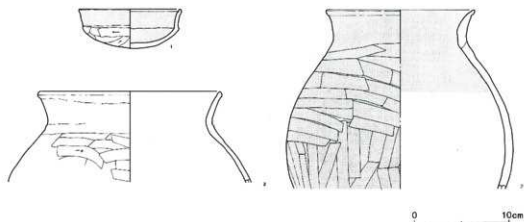
出土遺物は少なく、須恵器は坏の小片が数点で、土師器は坏1・壺1・台付甕1・甕1個体である。また、南壁際でチャート他の石が床直で出土しており、当初編物石かと考えたが、大きさや重さが不揃いで(350g～1kg)、断定できない。



第36図 8号住居跡カマド

8号住居跡出土土器観察表

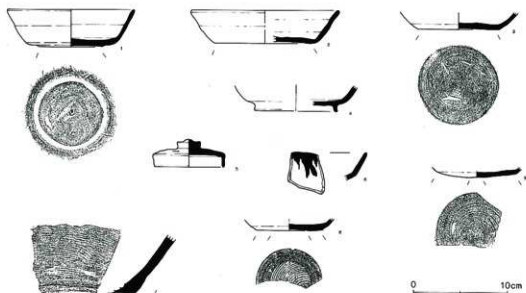
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.8	4.1		ACDEF	II	3	100%	床面、赤彩
2	甕	(15.7)			A~D	I	3	口縁	
3	甕	(19.5)			A~CF		4	口縁	



第37図 8号住居跡出土遺物

9号住居跡

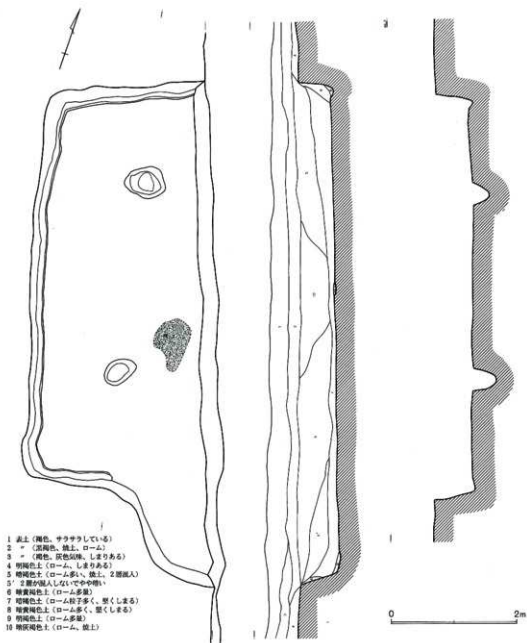
2号・4号住居跡の東側のO-11グリッドに位置するが、東側半分程は調査区外になり、カマドを含め規模は確認できなかった。カマドは調査区内では確認できなかったが、西壁の軸方向はN-16°-Wを指す。西壁長は6.5mを測る大型住居で、北壁に張り出し部があり、1.5m程壁のラインから突出している。壁溝は張り出し部以外は巡り、柱穴はコーナーに沿って穿たれている。深さも最深部では80cmで、暗褐色土を主体とした覆土である。覆土の堆積状態からは、カマドは東壁に構築されている可能性が高い。床面は全面が平坦な貼床で、焼土が点在している。また、貼床下からは、床



第38図 9号住居跡出土遺物

面で確認できた柱穴とややずれた位置で一对検出したが、柱間距離から拡張前の柱穴であろう。さらに、張り出しが始まる位置に小ピットがあるが、これも対になると思われ、出入口施設に関わるものであろう。

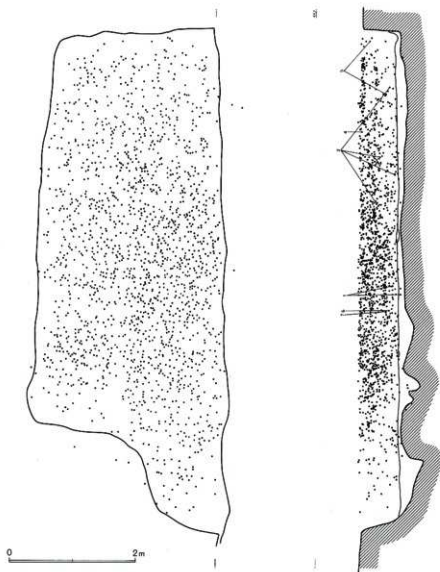
出土遺物は総数1457点と非常に多いが、大部分が破片であるため実測可能個体は少ない。これらの土器の個体識別の結果は、須恵器は坏15・高台坏1・蓋3・鉢1・甕2・壺類1個体で、土師器は坏1・台付甕2個体である。



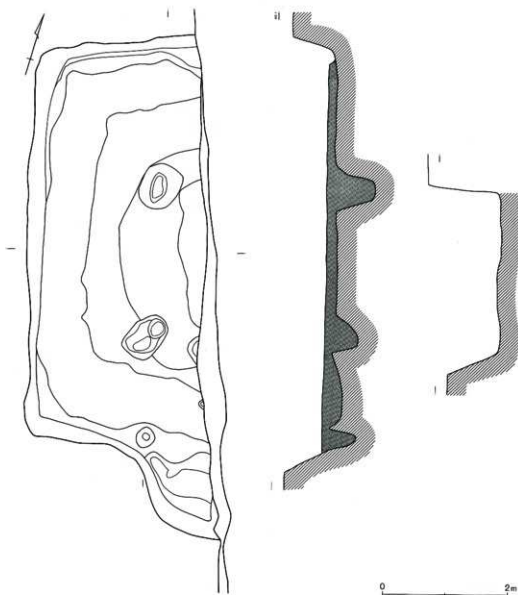
第39図 9号住居跡

9号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 色	調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.4	4.0	6.6	AEFH	II	4	80%	床、RA
2	坏	(15.7)			EFH	I	5	20%	床上6cm
3	坏			(8.4)	EH	II	6	30%	覆土、RA
4	高台坏			(8.6)	DEH	II	5	20%	上層
5	蓋	7.3	2.9		DEFGH	II	5	60%	下層
6	坏	(9.6)			ACE	II	4	口 縁	下層、口縁内面に油煙
7	壺				CEH	II	5	底 部	下層
8	坏			(7.0)	EH	II	5	底 部	RBb
9				(8.6)		II			RBa



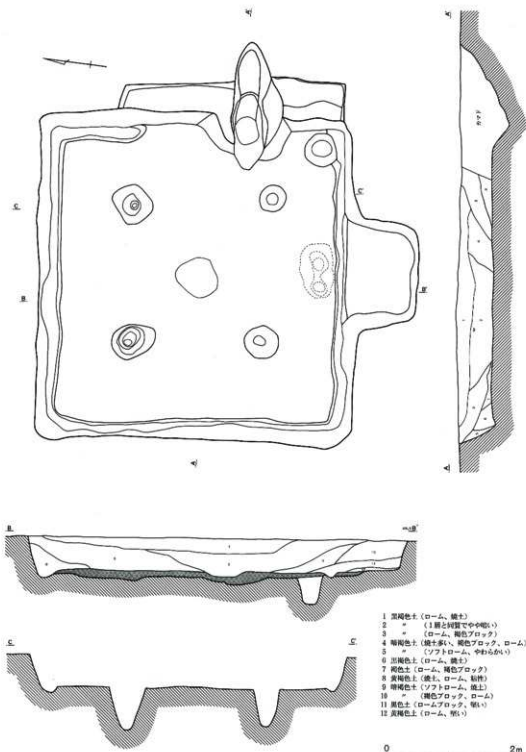
第40図 9号住居跡遺物分布図



第41図 9号住居跡掘り方

10号住居跡

7号・8号住居跡の東のV-11グリッドに位置し、主軸方向はN-83°-Eを指す。プランは東西5.2m、南北5.1mのほぼ方形を呈し、深さは約60cmを測る。床面は平坦で堅緻な貼床で、中央に焼土が散布し、コーナーに沿って柱穴が穿たれている。南壁中央には幅1.8m、奥行き1mの張り出し部があり、前面には貼床下に、深さ50cmのビットが一对ある。張り出し部の床面は非常に堅緻で、ロームが10cm程盛り上がるように堆積していた。壁溝はカマド近く以外は、張り出し部を含めて回り、南東コーナーには浅い貯蔵穴状のビットがある。



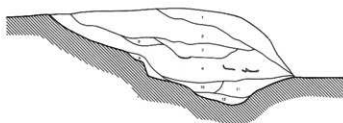
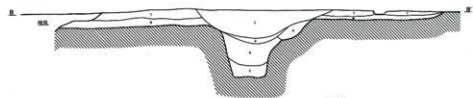
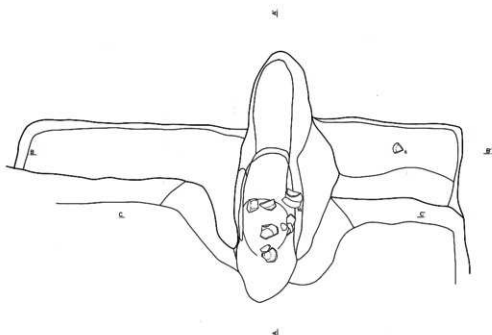
第42図 10号住居跡

カマドは東壁の南よりに構築され、全長2 m、焚口幅40 cmと大形で、ロームブロックを含んだ暗褐色土を袖部とし、内壁は焼土化している。4層が火袋部に相当し、段を持って煙道部へと続いている。石製支脚の位置から、平面的には3層が器設部になるだろう。また、カマド両脇には棚状遺構があり、埋没過程でここから落ち込んだような状態で土器が出土している。

遺物は非常に多く、総計1099点が覆土上層から床面・カマドにかけて出土しており、特にカマド側の東半に集中している。個体識別では60個体が確認されたが、須恵器：土師器の比率は51：9で須恵器が85%を占め、さらに供膳器の占める割合は90%近い。カマドなどから佐波理模倣の椀と蓋や内黒の土器なども出土している。刀子は3点で、36は床面出土で茎部に木質が残り、身部の先端が欠損し刃部は若干内湾する。37も床面出土で、関から刃部は研ぎ減りで大きく内湾する。38は覆土出土で、身部先端と茎部が欠損している。



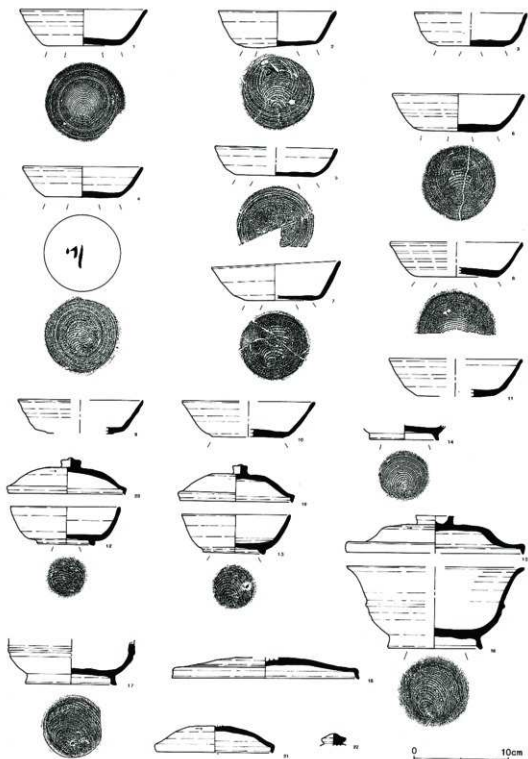
第43図 10号住居跡遺物分布図



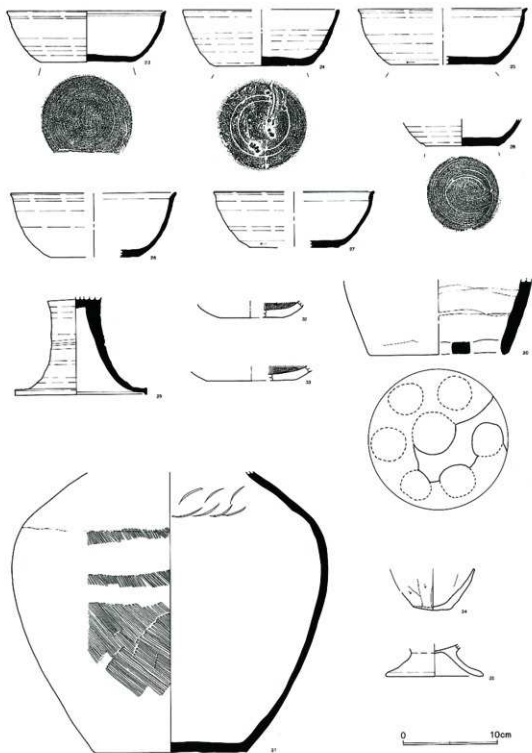
- 1 黒褐色土（ローム、焼土）
- 2 "（ローム、焼土、しまりあり）
- 3 "（炭化物、やわらかい）
- 4 暗赤褐色土（焼土、灰）
- 5 褐色土（焼土、ローム、火を受けている）
- 6 暗褐色土（焼土、ローム）
- 7 "（ローム、黒色土）
- 8 褐色土（ローム、焼土）
- 9 黒褐色土（焼土多い）
- 10 赤褐色土（ロームブロック、しまりあり）
- 11 暗褐色土（ローム、焼土、炭化物）
- 12 暗赤褐色土（ローム、焼土）
- 13 暗褐色土（炭化物、ローム）
- 14 "（ローム多い、灰）
- 15 炭灰褐色土（ローム多い）
- 16 "（堅くしまる）
- 17 黒褐色土（ローム多い）
- 18 赤褐色土（焼土化）

0 1 m

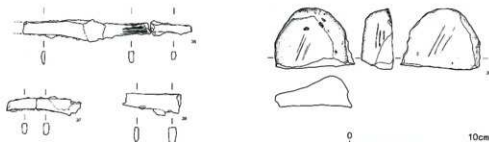
第44図 10号住居跡カマド



第45图 10号住居跡出土遺物 (1)



第46图 10号住居跡出土遺物（2）



第47図 10号住居跡出土遺物（3）

10号住居跡出土土器観察表

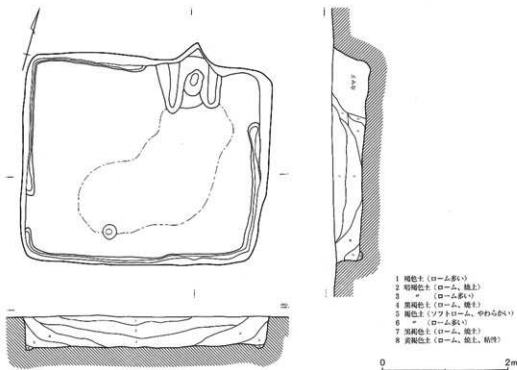
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.4	3.9	7.9	BDEH	I	5	80%	下層、LBb
2	坏	12.6	3.7	7.4	DEH	II	4	85%	覆土、RBb、歪んでいる
3	坏	(12.0)	3.5	7.2	BEH	II	4	30%	床、RBa
4	坏	12.8	3.2	8.0	ABDEFH	III	4	60%	下層、RBa
5	坏	(13.1)	3.0	8.3	ABEH	III	4	48%	カマド、RBb
6	坏	14.1	4.0	8.1	ABDEH	III	7	50%	棚状遺構、RBa
7	坏	(13.7)	3.8	(6.5)	DEH	II	6	65%	上層、歪んでいる
8	坏	(14.0)	3.7	(9.0)	ABEH	I	7	60%	床、RBb
9	坏	(13.2)	(5.5)	(7.0)	ADE	III	7	30%	カマド
10	坏	(14.0)	(3.8)	(7.4)	BDEH	II	6	40%	下層、RA
11	坏	(14.7)	(4.0)	(8.4)	BDEH	III	6	40%	床
12	高台坏	11.5	4.0	6.1	DEGH	II	5	95%	カマド、糸切り後付高台
13	高台坏	11.5	4.1	6.6	DEGH	II	5	90%	床、糸切り付高台
14	高台坏			7.4	ABDEH	I	5	底部	床
15	蓋	(18.8)	4.0		DEH	II	5	20%	床、R、※SJ10-№13の蓋
16	椀	(18.9)	8.7	10.0	DEH	II	6	57%	カマド、RBb、佐波理模倣
17	椀			(9.6)	DEH	I	5	20%	下層、回転糸切り、付高台、佐波理模倣
18	蓋	(20.0)			DEH	II	5	20%	床
19	蓋	11.9			DEHG	II	5	100%	床、歪んでいる
20	蓋	12.4			DEH	II	5	100%	壁直下、歪んでいる
21	蓋	12.4			DEH	II	5	95%	床、R、つまみ欠損
22	蓋				EH	II	6	つまみ	上層
23	椀	16.8	5.4	9.9	BEH	I	5	75%	床、RA
24	椀	(16.6)	6.0	9.6	DEH	II	5	50%	カマド、カマド袖
25	坏	(18.0)	5.9	(11.2)	ABDEH	II	3	20%	カマド、下層、RA、底部外面宛記号
26	坏	(17.6)	6.8	(9.3)	ABDEH	II	7	45%	下層、R
27	坏	(17.0)	5.9	(9.6)	ABEH	I	7	30%	床、R
28	坏			7.8	ABDEH	II	7	底部	カマド、RA
29	高台坏			13.9	BDE	I	7	底部	床
30	甕			(14.1)	BDEH	I	7	底部	下層、底部に6穴
31	甕			16.0	BDE	I	5	45%	床、胴上半部、中央部、下半部平行叩き目
32	坏			(6.8)	AEF	I	4	底部	床、内黒研磨
33	坏			(9.6)	BEF	I	4	底部	上層、内黒
34	甕			4.0	ACF	II	4	底部	カマド
35	台付甕			10.4	ACEF	II	4	台部	床下

11号住居跡

S-13グリッドに位置し、北には掘立柱建物跡群が隣接している。主軸方向はN-11°-Wを指し、プランは東西にやや長い長方形を呈している。規模は3.95×3.35mで、深さは最深部で55cmを測る。床面は平坦で、カマド前面から南壁際の深さ5cmの小ピットにかけて堅緻な部分が広がっている。壁溝は西壁と北東コーナーを含めたカマド両脇以外は巡っている。覆土はきれいな自然堆積の状態を示している。

カマドは北壁の東よりに構築され、全長220cm、焚口幅70cmを測り、壁外への突出は少ない。暗灰褐色土を袖部として使用し、4層が天井部の崩落層で、5・6層が燃焼部と煙道部に相当するであろう。

出土遺物は少なく、土師器の坏と甕の小片及び須恵器坏と甕の破片が1点ずつだけである。個体識別も土師器と須恵器の坏が各1点である。



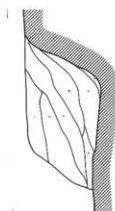
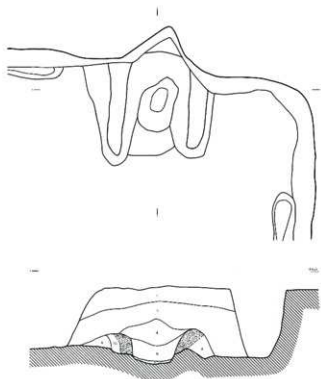
第48図 11号住居跡



第49図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏			(10.6)	A~CFH	Ⅲ	1	底部	覆土、L



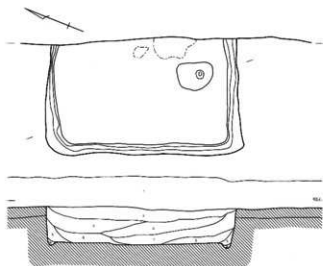
- 1 黒褐色土（ローム多い）
- 2 暗褐色土（ローム、焼土、炭化物）
- 3 黒褐色土（ローム、焼土、黒色土）
- 4 褐色土（焼土多い）
- 5 暗灰褐色土（ローム、焼土若干）
- 6 赤褐色土（焼土、ローム、灰土）
- 7 暗灰黄褐色土（焼土、砂質）
- 8 赤褐色土（焼土化）
- 9 暗灰褐色土（ローム）
- 10 "（黒色土、ローム）

0 1m

第50図 11号住居跡カマド

12号住居跡

U-14グリッドに位置し、カマドを含めた東側は調査区外に及んでいる。西壁長は3.1mで、深さは60cmを測る。表土からの堆積を観察できたので、遺構確認がソフトロームより上層の暗褐色土で



- 1 赤色土（表土層）
- 2 暗褐色土（ローム、焼土）
- 3 "（ローム、2層よりかたい）
- 4 暗褐色土（ローム粒子多い）
- 5 赤褐色土（ローム多い）
- 6 "（ローム、焼土）
- 7 暗褐色土（ローム、焼土）
- 8 暗黄褐色土（黒色土、ローム）

0 2m

第51図 12号住居跡

可能であった。ローム面を床面としており、平坦で壁溝が巡っている。南壁下に周囲に低い高まりを持った小さな窪みがあり、直径50cm程の範囲で非常に堅緻になっており、特に凹部は顕著である。出入口に関する施設であろうが、梯子ピットというよりは、三和土あるいは台を置いた痕跡と考えられる。

出土遺物は少なく、土器は坏と壺の破片だけで、他に床面に密着した状態で刀子が検出されている。茎部に木質が付着し、身部は直線的で先端まで残存している。



第52図 12号住居跡出土遺物

12号住居跡出土土器観察表

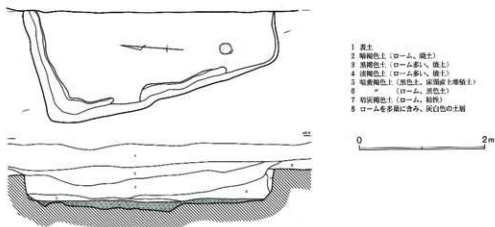
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺			(12.5)	A~DH	III	4	底部	覆土

13号住居跡

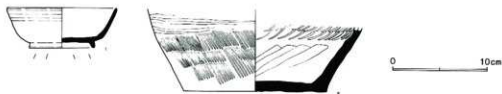
K-10グリッドに位置し、奈良時代の遺構では最も北の台地奥部にあり、約50m程で小さな谷に至る。本住居跡から徐々に緩やかにこの谷に向かって傾斜を始め、現状でも西から東に流れる細い流路がある。谷の調査の結果、黒色土が厚く堆積しており、現在よりも大きな谷であったことがわかったが、遺物は全く出土していない。

カマドを含めた東側は調査区外におよぶため、確認できた壁は西壁だけである。西壁長は3.9mで深さは50cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝は幅広く部分的に巡っている。覆土中には焼土が多く見られ、特に4層中には多量に含まれる部分がある。

出土遺物は個体識別により8個体で、土師器は坏片が1点である。



第53図 13号住居跡



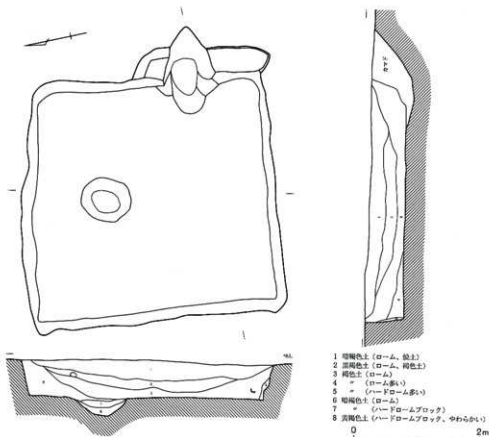
第54図 13号住居跡出土遺物

13号住居跡出土土器観察表

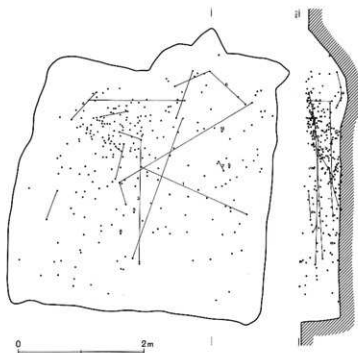
番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	高台坏	11.6	(4.3)	7.0	ABH	I	5	60%	覆土、LBb
2	壺			15.0	ABGH	II	7	底部	覆土

14号住居跡

Y-11グリッドに位置し、日枝神社の参道にあたるため、参道と同脇の並木により遺構確認と調査は非常に困難であった。主軸方向はN-98°-Sを指し、規模は南北4.1m、東西3.9mで、深さは60cmを測る。床面はほぼ平坦な貼床で、壁際が深い掘り方をもち、特に堅緻な部分はない。壁溝と柱穴はないが、床面中央やや北よりに土壇状の落ち込みがある。

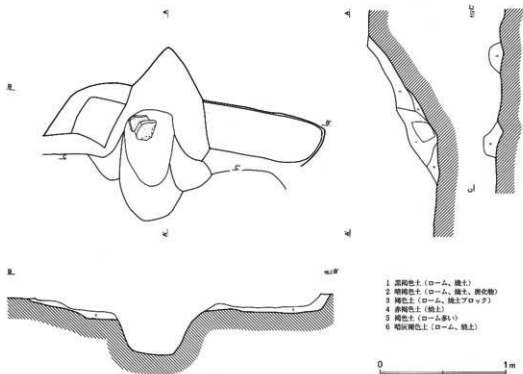


第55図 14号住居跡

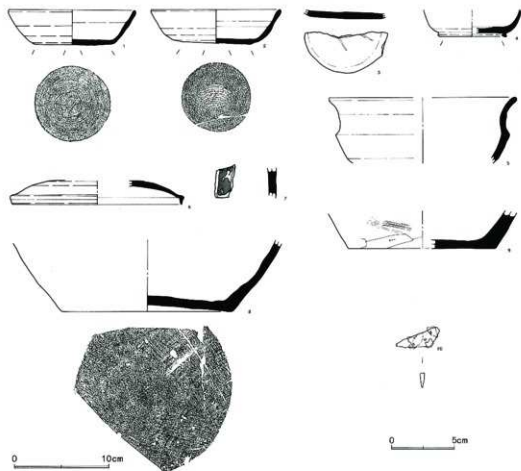


第56図 14号住居跡遺物分布図

カマドは東壁の南よりにあり、両脇に棚状遺構が検出されたが、カマド周辺に木の根が深く入り込んでいたため詳細な土層観察はできなかった。暗灰褐色土を袖とし、砂岩の支脚位置から1層が器設部に相当するであろう。出土遺物は285点あるが、土師器は数片で大部分は須恵器である。また、個体識別では甕類は土師器の底部だけで、須恵器环蓋類が17個体と土師器皿1個体と、供饗器が主体を占めている5は佐波理模倣の碗で、10は床面出土の刀子である。



第57図 14号住居跡カマド



第58図 14号住居跡出土遺物

14号住居跡出土土器観察表

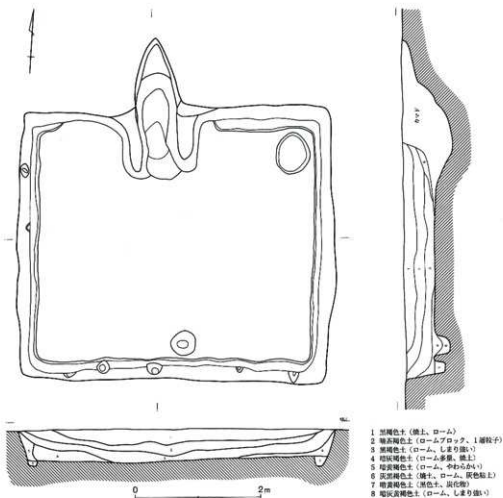
番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.5	3.8	8.0	EH	I	6	95%	下層、RBa
2	坏	13.8	3.6	7.4	DEH	II	6	90%	床上 4 cm、RBa
3	坏			7.8	DEH	II	6	底 部	上層、底部に宛記号有
4	高台坏			(7.0)	DEH	II	6	底 部	上層、RA
5	碗	(20.0)			DEFH	II	5	口 縁	上層、佐波理模倣
6	蓋	(18.0)			DEH	II	5	30%	カマド、床上10cm
7	坏				CEH	II	4		下層、内面に漆付着
8	鉢			(18.0)	DEH	II	5	底 部	床上 7 cm
9	壺			(15.5)	DCEH	II	5	底 部	上層、胴部平行叩き、下端宛削り

15号住居跡

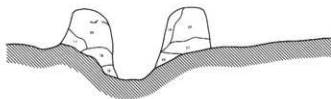
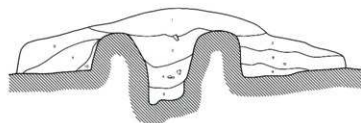
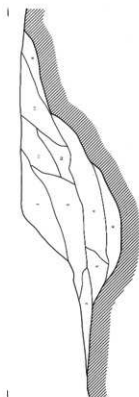
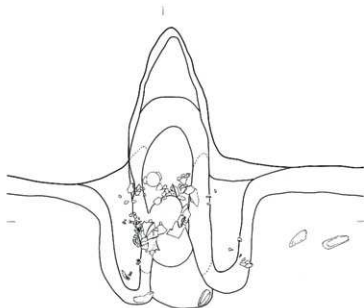
1号住居跡の南東に隣接し、Q-11グリッドに位置する。重複はないが、東には接するようにして掘立柱建物跡群が並び、主軸方向はN-4°-Wを指す。規模は東西5.1m、南北4.3mの長方形を呈し、深さは50cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝はカマドを除いて巡る。カマド正面の南壁下に小ピットと、北東コーナーに深さ13cmの貯蔵穴があり、他に壁溝内に5〜30cmの深さの小ピットが穿たれている。

カマドは北壁の中央にあり、全長220cm、焚口幅50cmで内壁が焼土化した大形のカマドである。袖は砂質の暗褐色土で、4・13層が燃焼部と煙道部に相当し、2層は天井部が崩落し流失したものであろう。

遺物は845点出土しているが、個体識別では24個体中20個体が須恵器で、さらに須恵器坏が13個体を占めている。1はカマド出土の坏で、7は覆土出土の墨書土器で不明瞭だが『裂』と判読できる。



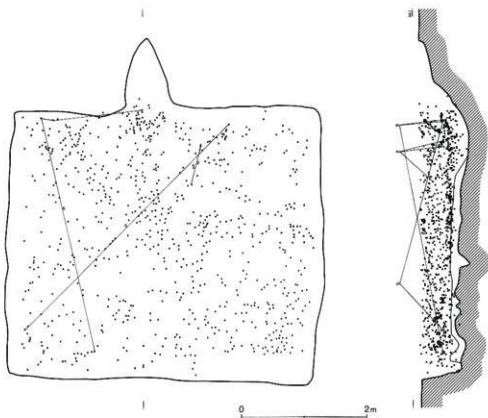
第59図 15号住居跡



- 1 暗褐色土 (ローム、粘土)
- 2 " (粘土多い)
- 3 暗灰褐色土 (粘土、ローム、礫土)
- 4 " (粘土、礫土多い)
- 5 灰褐色土 (ローム)
- 6 " (ロームブロック、堅い)
- 7 暗褐色土 (粘土、ローム)
- 8 " (粘土、ローム、粘土)
- 9 黒褐色土 (炭化物、ロームブロック、灰)
- 10 淡灰褐色土 (粘土、礫土)
- 11 暗褐色土 (粘土、ローム)
- 12 " (11層と同質で礫土多い)
- 13 暗赤灰色土 (礫土多く、堅い)
- 14 暗褐色土 (礫土多く、堅い)
- 15 " (ローム、粘土、砂質)
- 16 暗褐色土 (粘土多い)
- 17 ロームブロック+暗灰褐色土
- 18 暗灰褐色土 (ローム、礫土多い)
- 19 " (ロームブロック、しまり強い)

0 1m

第60図 15号住居跡カマド



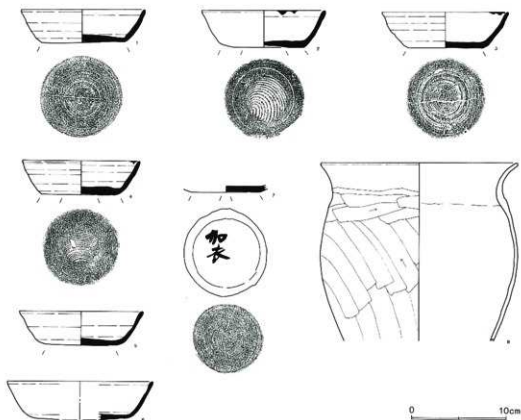
第61図 15号住居跡遺物分布図



重機による表土除去作業



15号住居跡周辺の調査



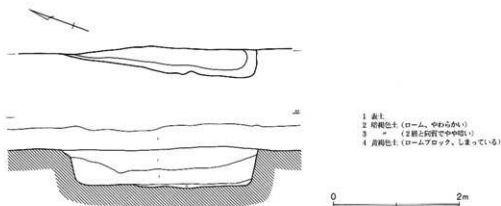
第62図 15号住居跡出土遺物

15号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	13.1	3.5	8.8	DEH	II	5	100%	カマド、RA、底部に篋記号有
2	坏	13.1	3.9	8.2	BCEH	II	5	100%	中層、RBb、油煙付着
3	坏	13.2	3.8	7.9	BFH	II	7	100%	床上10cm、RA、口縁部内側油煙
4	坏	12.5	3.6	8.0	ABH	II	4	100%	下層、RBa、口縁部内側油煙
5	坏	13.1	3.6	7.4	BCEFH	II	6	50%	床上7cm、RA
6	坏	(15.4)	(4.1)	(10.5)	BDEH	II	6	30%	カマド他、全体的に磨滅
7	坏			(7.2)	DEH	II	6	底 部	下層、底部に墨書有「親」
8	甕	21.8	(18.8)		ABCEF	I	4		カマド、口縁部横ナデ、体部外面篋削り

16号住居跡

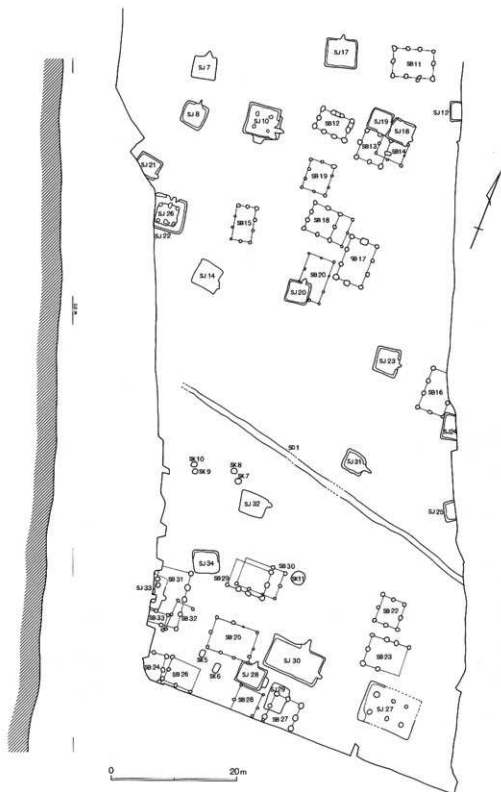
Q-12グリッドに位置し、2号掘立柱建物跡と重複している。調査できたのは西壁と南西コーナーの一部だけで、大部分が調査区外に及んでいるため、規模・構造やカマドの位置も確認できなかった。出土遺物も皆無で時期も不明である。深さは65cmで、調査できた部分には壁溝やピットは見られない。



第63図 16号住居跡



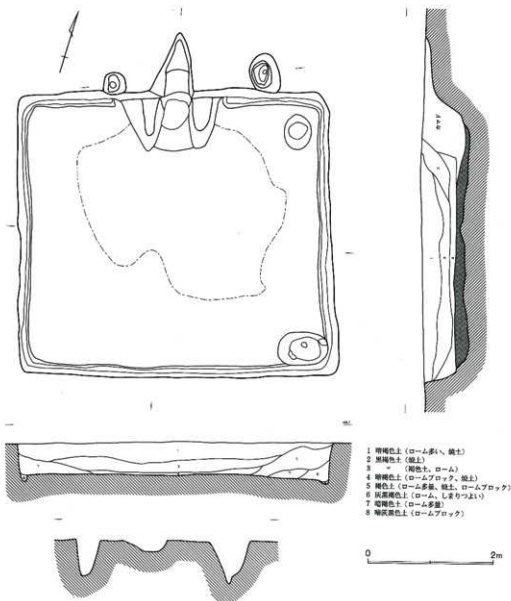
東上空から見た光山遺跡群 (川越市分) 左上方が小畔川



第64図 奈良時代遺構分布図 No 2

17号住居跡

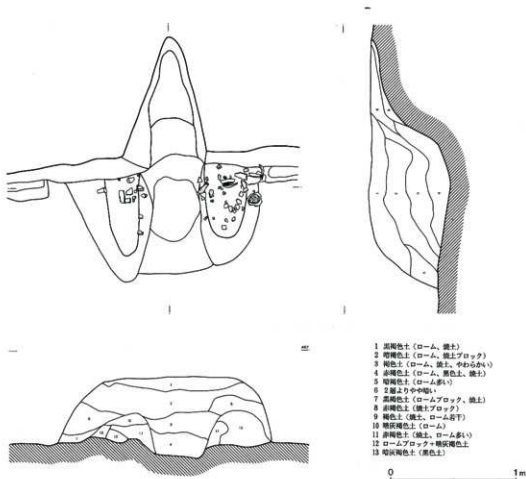
台地上の住居群のほぼ中央、U-12グリッドに位置し、6 m東には11号掘立柱建物跡が平行して並んでいる。主軸方向はN-17°-Wを指し、規模は東西5 m、南北4.6 mで深さは55 cmを測る。床面はロームブロックと暗褐色土を混ぜた貼床で、カマドから床面中央部にかけて堅緻な部分が広がる。壁溝はカマド以外は廻り、東壁の南北コーナーには深さ25 cmの貯蔵穴状の落ち込みがある。貼床下でも西壁の南北コーナーで同様の落ち込みが確認できた。また、壁外のカマド両脇には深さ60 cmほどのピットが壁に接して一対あり、位置からも本住居に伴うもので、カマドの構造に関わる施設であろう。



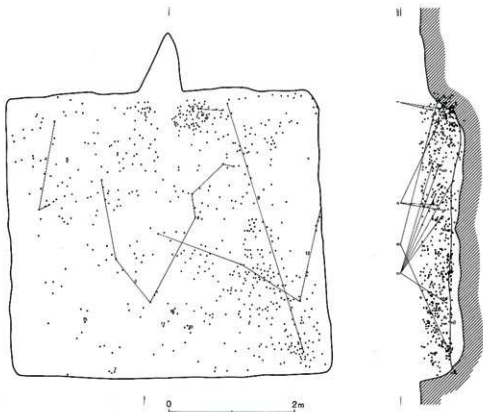
第65図 17号住居跡

カマドは北壁中央に構築され、全長190cm、焚口幅60cmで、袖には暗灰褐色土を使用している。4層が燃焼部で8層が煙道部に相当し、煙道は垂直に近く立ち上がった後、壁外から緩やかに煙出しに至る。カマド内部からは遺物はほとんど出土していないが、両袖の上部から多くの土器が検出されている。

遺物は350点が出土しており、個体識別では26個体になる。土師器は甕の破片が多く、坏類3・甕4・台付甕2個体である。須恵器は坏類12・高台坏1・蓋2・鉢1で、漆の付着した坏が1点ある。また、覆土中から桃種子が出土している。



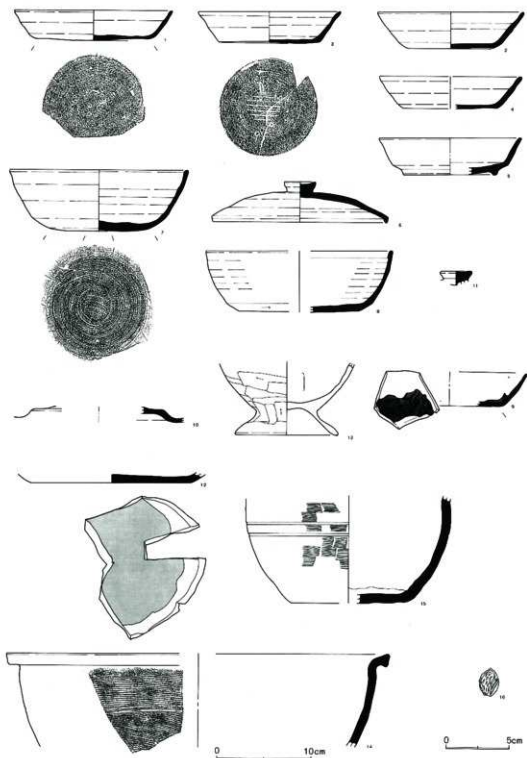
第66図 17号住居跡カマド



第67図 17号住居跡遺物分布図

17号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(16.8)	3.2	12.1	DEH	II	5	35%	カマド、LA、堅緻
2	坏	(15.4)	3.9	(9.2)	BCDEH	II	5	25%	床土3cm、RA、砂粒多、ヘラ記号
3	坏	(15.1)	3.4	(10.6)	DEH	II	6	70%	カマド、RBa、静止糸切り
4	坏	(15.2)	3.4	(10.0)	DEH	II	5	40%	カマド、RA
5	高台盤	(15.2)	3.9	(10.0)	BE	I	6	20%	下層、付高台
6	蓋	(18.4)	4.3		BDEH	II	5	40%	カマド、R
7	坏	(19.0)	6.5	(6.5)	EH	II	5	40%	床下
8	碗	(19.8)	6.5	(12.8)	BDEH	II	5	20%	床直
9	坏		3.5		DEH	II	5		漆付着
10	蓋				DEH	II	4	10%	覆土
11	蓋				DEH	II	5	つまみ	覆土
12	転用硯			(17.2)	DEFH	II	6	底部	床直、転用硯、部分的に墨痕
13	台付甕								
14	鉢	(37.4)				II		口縁	
15	鉢			(12.0)	ABDEH	I	7	30%	床面、体部平行叩き目



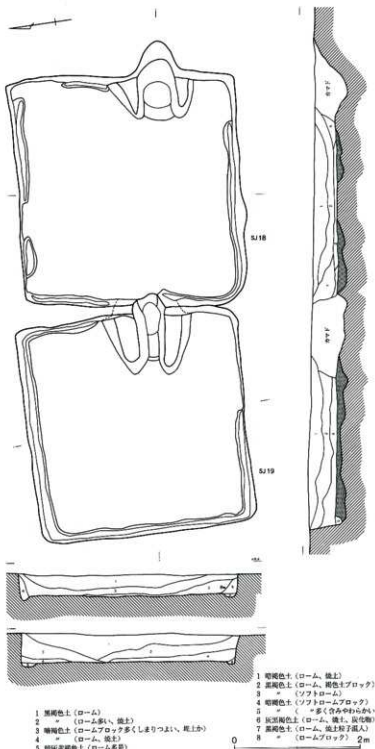
第68图 17号住居跡出土遺物

18号住居跡

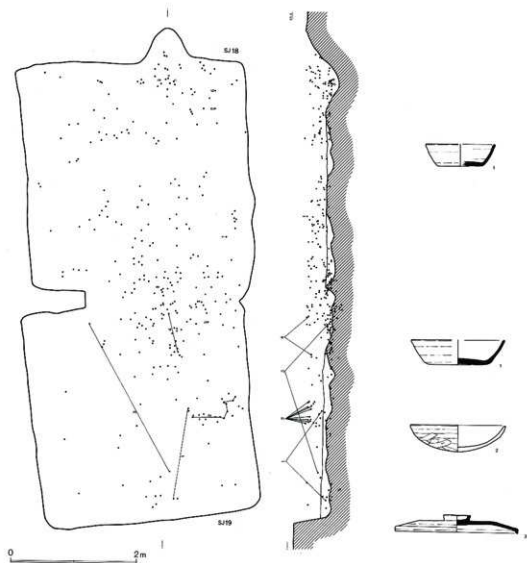
U・V-13グリッドに位置し、19号住居跡のカマドの先端を破壊して造られ、13・14号掘立柱建物跡と重複している。掘立柱建物跡の柱穴とは南壁と接するようにして平行しており、新旧関係は把握できなかった。主軸方向はN-94°-Sを指し、規模は一辺3.55mの方形を呈し、深さは40cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁際は深く掘る掘り方である。壁溝は部分的に途切れながら巡り、柱穴や貯蔵穴はない。

カマドは東壁の南よりに構築され、全長125cm、焚口幅50cmで、床面から25cm掘り窪められている。袖は暗灰褐色土で、燃烧部は5層、3層の一部が天井部崩落層に相当する。燃烧部には体部の欠損した須恵器环が並んで出土している。

出土遺物は、須恵器环5、盤1個体・蓋の小片1点・甕の小片5点で、土師器は甕1と环2および内面が磨かれている碗1個体及び、石製紡錘車1点である。



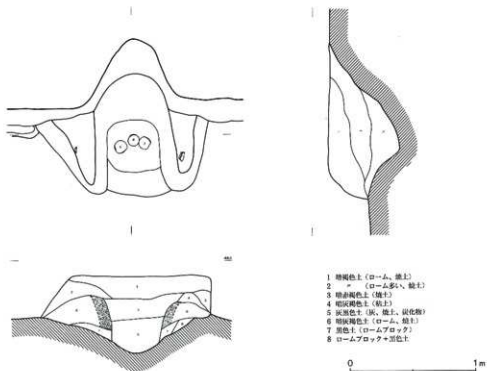
第69図 18号・19号住居跡



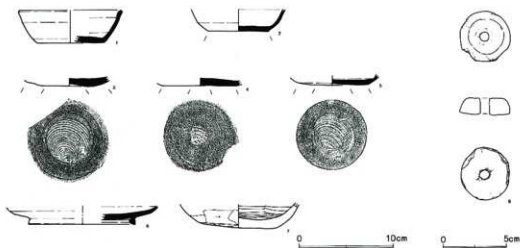
第70図 18号・19号住居跡遺物分布図

18号住居跡カマド断面と土器出土状況
右から遺物No 3・4・5





第71図 18号住居跡カマド



第72図 18号住居跡出土遺物

18号住居跡出土土器観察表

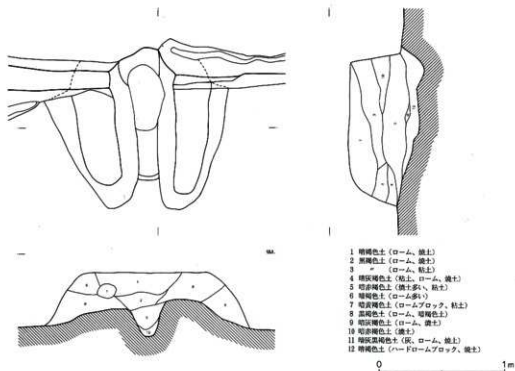
番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存	出 土 位 置・そ の 他
1	坏	(10.8)	3.5	(7.0)	BFH	II	5	25%	上層、R
2	坏			6.4	DGH	II	5		床下、RA
3	坏			8.2	DEH	II	6		カマド、RBb、窠記号有、堅緻
4	坏			7.6	DEH	II	5		カマド、RBa
5	坏			7.4	DEH	II	5		カマド、RBb、堅緻
6	高台盤			11.2	EH	I	5		床上4cm、堅緻
7	椀			8.2	ABEF	II	4		内面横位磨き、外面荒削り

19号住居跡

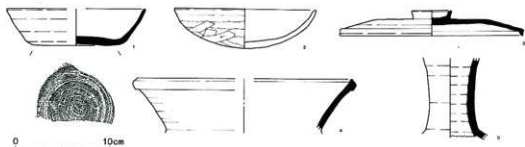
18号住居跡の西に接するように並び、13・14号掘立柱建物跡と重複している。主軸はほぼ東を指し、規模は一辺3.5mの方形プランで、深さは45cmを測る。床面は平坦な貼床で、壁溝は南東コーナーを除いて巡る。柱穴や貯蔵穴はない。

カマドは東壁中央やや南よりに構築されているが、煙道部先端を18号住居跡に破壊されているため全長は計測できない。焚口幅は20cmと狭く、袖は暗灰褐色土を使用しているが不明瞭である。5層は天井などの構築材が崩れたもので、11層が器設部の位置に相当するであろう。

出土遺物は個体識別の結果、須恵器は坏2・蓋1・甕1・長頸壺1個体、土師器は坏1・甕1個体である。



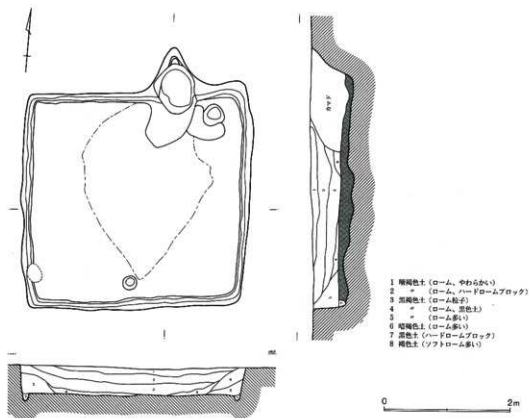
第73図 19号住居跡カマド



第74図 19号住居跡出土遺物

19号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	14.6	3.9	9.0	DEH	II	5	35%	床下、RA
2	坏	15.0	4.2	1.0	AC~FH	I	3	50%	上層、堅緻
3	蓋	(19.4)			DEH	II	5	40%	床上2cm、R
4	甕	(23.8)			BEH	I	8	口縁	カマド、堅緻
5	埴壇蓋				DEGH	I	5	頸部	床上7cm、堅緻、頸部



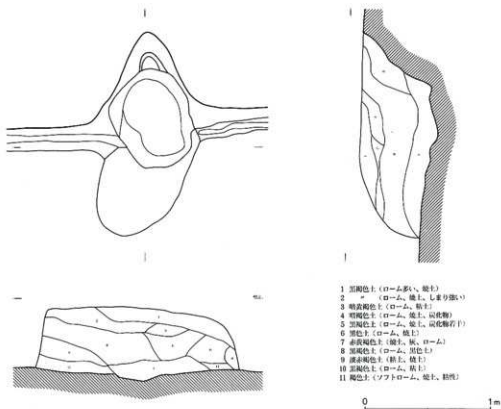
第75図 20号住居跡

20号住居跡

Y-12グリッドに位置し、20号掘立柱建物跡と重複しており、遺構確認時には明確に新旧関係は把握できなかったが、本住居が20号掘立柱建物跡を切って造られている可能性が高い。主軸方向はN-4°-Wを指し、規模は東西3.6m、南北3.4mで、深さは50cmを測る。床面は平坦な貼床で、カマドから中央にかけて堅緻である。壁溝はカマドを除いて巡り、南壁下に深さ23cmの小ピットが穿たれており、北東コーナーには周囲に高まりをもった深さ11cmの貯蔵穴がある。

カマドは北壁のやや東より構築され、全長160cm、最大幅85cmである。7・9層は天井部の崩落層で、袖部は痕跡も確認できなかった。全体的に火床面や灰層も未発達で、各部の復元が不可能な程流失していた。

出土遺物は少なく、個体識別でも、須恵器坏1、土師器台付甕1個体であった。



第76図 20号住居跡カマド



第77図 20号住居跡出土遺物

20号住居跡出土土器観察表

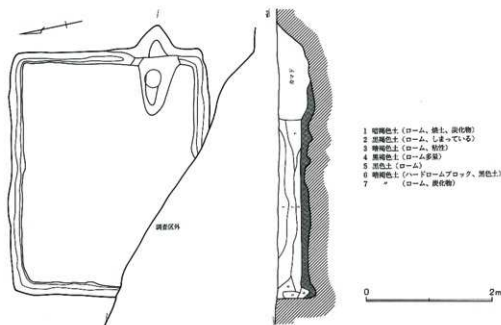
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	(18.0)			BDEH	II	5	10%	カマド、磨滅
2	甕				DEH	I	6		

21号住居跡

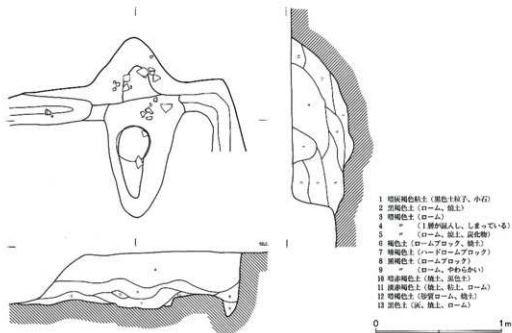
X-10を中心としたグリッドに位置するが、南西コーナー部分は調査区外に及んでいる。主軸方向はN-100°-Sを指し、規模は東西3.84m、南北3.2mで、深さは40cmを測る。床面は平坦な貼床で、カマドを除いて壁溝が巡っており、柱穴などはない。

カマドは東壁の南よりに構築されているが、流失のため袖部などは確認できなかった。6・7層が燃焼部に、11・12層が煙道部に相当するであろう。1層は当初器設部の痕跡かと考えたが、燃焼部まで続かず、4層を掘り込んだもののようである。

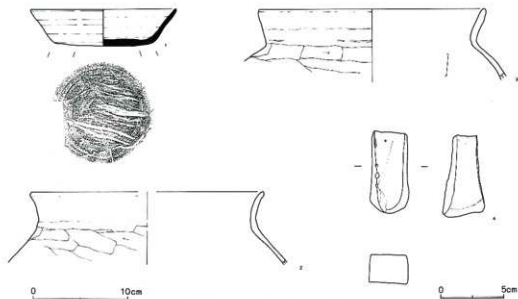
遺物は109点出土しているが、小片が多く、個体識別の結果は須恵器杯2、土師器甕2個体と砥石がカマド脇から1点と少ない。



第78図 21号住居跡



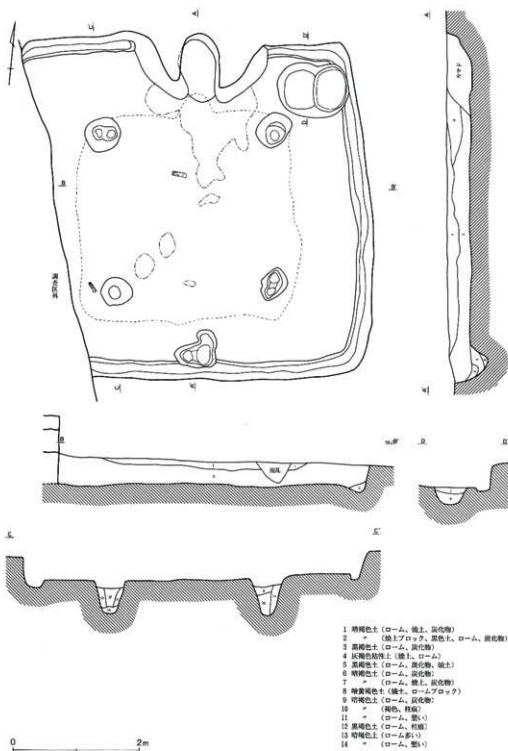
第79図 21号住居跡カマド



第80图 21号住居跡出土遺物

21号住居跡出土土器觀察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	臍	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	15.6	3.9	10.5	DEH	II	5	80%	床上7cm、RA
2	甕	(24.7)			ACEFH	II	3	55%	床直
3	甕	(24.3)			ACE		4	口縁	床上6cm



第81図 22号住居跡

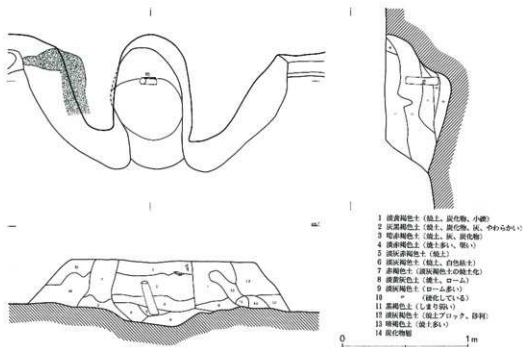
22号住居跡

21号住居跡の南東に隣接しており、西壁は調査区外に及んでおり確認されなかった。また、26号住居跡を埋めて床面を貼って構築されている。主軸方向はN-10°-Wを指し、規模は西壁が未確認であるが、北西コーナーが一部見えており、一辺約5.2mの方形を呈するであろう。深さは最深部で50cmを測る。覆土の堆積は2層には焼土や黒色土が混入し、床面を含めて炭化物・炭化材が多く、自然堆積とは思えない状況を示している。床面はロームに暗褐色土を含ませた平坦な貼床であり、カマド前面と小範囲に非常に堅緻な部分が点在する。壁溝はカマド下面を含めて巡り、柱穴は各コーナーに沿って4本穿たれている。貯蔵穴は北東コーナーに、またカマドに向かい合うように南壁下に小ピットがある。

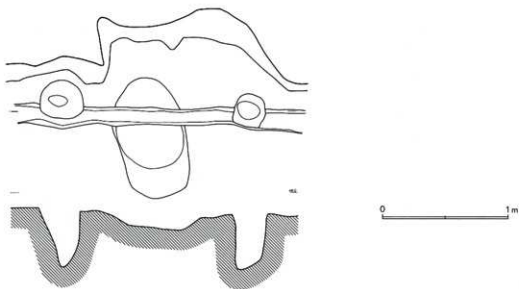
カマドは北壁中央に構築され、全長105cm、焚口幅40cmで、淡灰褐色土を袖とし、3層が燃焼部となり土製支脚の出土位置から、5層直上が器設部に相当するだろう。袖部本体の7層の外側は焼けて硬化しており、カマド内部以外からも加熱されたことが分かる。また、カマドの掘り方を確認したところ、両袖下面から深さ45cmのピットと、壁溝が検出された。

以上の調査結果から本住居が火災住居で、貯蔵穴や柱穴の観察によると、建て替えと最終的に埋め戻された可能性を指摘することができる。

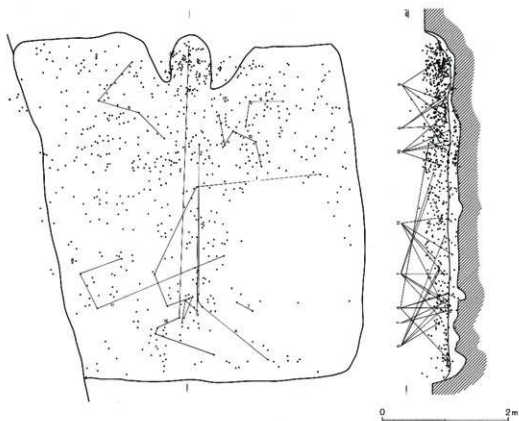
遺物は約750点出土しており、個体識別によると、須恵器環16・碗2・蓋1・甕3個体と土師器環5・甕5個体である。14は床面出土の転用碗で朱墨痕がある。15・16はカマド出土の土製支脚と砥石で、17は身部先端が欠損した刀子、18は釘である。接合関係もかなり多くの土器が接合しており、覆土上層と床面出土の接合例も観察できる。



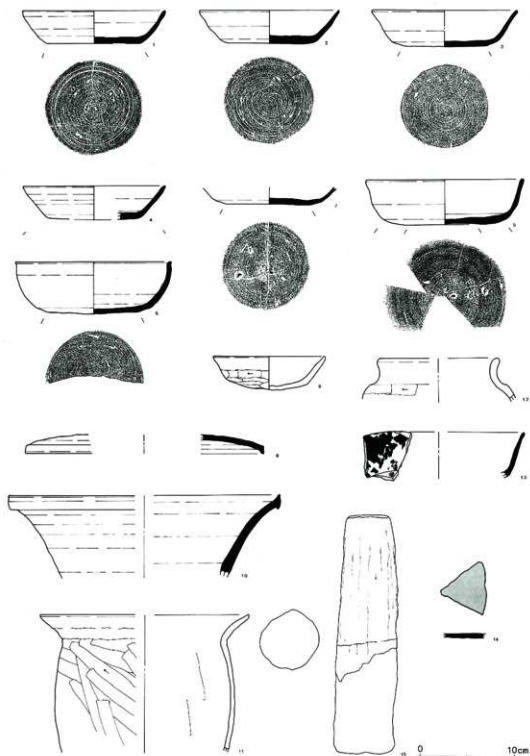
第82図 22号住居跡カマド



第83図 22号住居跡カマド掘り方



第84図 22号住居跡遺物分布図



第85图 22号住居跡出土遺物(1)